

わき やま
脇 山 VI

—県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡第7次、栗尾B遺跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第386集



1994

福岡市教育委員会

WAKI

YAMA

脇

山

VI

—県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡第7次、栗尾B遺跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第386集



遺跡略号 WKA-7

KRB-1

遺跡調査番号 9215

1994

福岡市教育委員会

卷頭図版



脇山地区圃場整備事業地（南東上空から）

序 文

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、子孫に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市像」を目標の一つとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発事業によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であります。このため本市教育委員会では事前に発掘調査を行い、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は、昭和61年度から実施されている早良区脇山地区の県営団地整備事業に伴う発掘調査のうち、平成4年度に調査した脇山A遺跡及び栗尾B遺跡の成果を報告するものです。今回の調査では、縄文時代から中世にいたる数多くの資料を得ることができ、脇山地区の歴史を解明する上で、大きな手がかりとなるものと考えられます。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、御理解と御協力を賜りました多くの方々に対し、心から謝意を表します。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 尾 花 剛

例　　言

1. 本書は県営脇山地区圓場整備事業に伴い、福岡市教育委員会が1992年4月から10月にかけて発掘調査を実施した脇山A遺跡第7次調査及び栗尾B遺跡第1次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣・屋山洋・黒田和生・英豪之・辻節子・土生喜代子・平川史子・山田ヤス子による。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は榎本・屋山・黒田和生が中心に行い、石器の一部を杉山富雄が行った。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は榎本・屋山が行い、航空及び空中写真の撮影は衛空中写真企画による。
5. 本書の掲載した遺物写真の撮影は榎本による。
6. 本書に掲載した挿図の製図は榎本・屋山・黒田が中心に行い、石器の一部を杉山富雄が行った。
7. 本書の作成にあたっては有馬千恵美・西島信枝・原田真美・松尾幸子・松尾真澄の協力を得た。
8. 本書に使用した方位は磁北で、真北より6°21'西偏する。
9. 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、焼土坑をSX、ピットをSPと記号化した。
10. 本書に関わる図面、写真、遺物等の一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
11. 本書の執筆はIを濱石哲也が、IV-2., 3. を屋山が、他を榎本が行った。
12. 本書の編集は屋山の協力を得て、榎本が行った。

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. これまでの調査経過	4
1. 1986年度～1991年度	4
2. 1992年度	4
3. 1993年度	6
IV. 藩山A遺跡第7次調査の記録	8
1. 調査の概要	8
2. A区の調査	8
1) 概要	8
2) 遺構と遺物	8
(1)土坑	8
(2)焼土坑	8
(3)旧河川	11
(4)その他の遺物	11
3. B区の調査	11
1) 概要	11
2) 遺構と遺物	11
(1)土坑	11
(2)焼土坑	11
(3)溝	14
(4)ピット群	14
(5)旧河川	14
(6)その他の遺物	14
4. C-1区の調査	16
1) 概要	16
2) 遺構と遺物	16
(1)土坑	16
(2)溝	21

(3) 焼土坑	21
(4) その他の遺構と遺物	21
5. C-2区の調査	24
1) 概要	24
2) 遺構と遺物	24
(1) 墨立柱建物	24
(2) 土坑	30
(3) 溝	34
(4) 焼土坑	38
(5) その他の遺構と遺物	38
V. 栗尾B遺跡第1次調査の記録	40
1. 概要	40
2. 遺構と遺物	40
1) 土坑	40
2) 溝	43
3) 焼土坑	49
4) 包含層	49
5) その他の遺物	53
VI. 結語	54

挿図目次

第1図 四辺遺跡分布図 (1/75,000)	3
第2図 脇山地区面積整備年次事業地及び遺跡群 (1/15,000)	5
第3図 脇山A遺跡第7次・栗尾B遺跡第1次調査区位置図 (1/3,000)	7
第4図 SX301・303・308・309実測図 (1/40、1/80)	9
第5図 A区出土遺物実測図 (1/1、1/3)	10
第6図 SX201~205・208実測図 (1/40)	12
第7図 SX209~212・229・242実測図 (1/40)	13
第8図 B区出土遺物実測図 (1/1、2/3、1/3)	15
第9図 SK001・004・005・012・014実測図 (1/40、1/60)	17
第10図 SK007・009実測図 (1/60)	18
第11図 SK017・020・021・022実測図 (1/40)	19
第12図 SK004・005・007・009・012出土遺物実測図 (1/2、1/3)	20

第13図	SD099出土遺物実測図 (1/3)	21
第14図	SX002・003・006・008・016実測図 (1/40) 及びSX016出土遺物実測図 (1/3)	22
第15図	C-1区ピット及び遺構検出面出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)	23
第16図	SB901・902・903・904実測図 (1/100)	25
第17図	SB905・906・907・908実測図 (1/100)	26
第18図	SB909・910実測図 (1/100)	28
第19図	SB911・912実測図 (1/100) 及びSB903・907・908・910・911出土遺物実測図 (1/3、1/4)	29
第20図	SK411・413・415・417・421・422・498実測図 (1/40)	31
第21図	SK569・645・766・896実測図 (1/40)	32
第22図	SK422・498・569・766実測図 (1/2、1/3)	33
第23図	SD419・497・845・846土層断面実測図 (1/40)	35
第24図	SD419・845・846出土遺物実測図 (1/3、1/4)	36
第25図	SX403・404・406・412・414・420実測図 (1/40)	37
第26図	C-2区ピット及び遺構検出面出土遺物実測図 (1/3、1/4)	39
第27図	SK009・013・014実測図 (1/60)	41
第28図	SK014・037出土遺物実測図 (1/3)	42
第29図	SK037実測図 (1/40)	42
第30図	SD012土層断面実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	43
第31図	SX001~006実測図 (1/40)	44
第32図	SX007・008・011・015実測図 (1/40)	45
第33図	SX016~020実測図 (1/40)	46
第34図	SX021~025・027実測図 (1/40)	47
第35図	SX028~034実測図 (1/40)	48
第36図	SX035・036実測図 (1/40) 及びSX033出土遺物実測図 (1/3)	49
第37図	1~10グリッド遺物分布図及び土層断面図 (1/100)	50
第38図	3・4グリッド遺物出土状況実測図 (1/20)	50
第39図	包含層出土遺物 I (1/3)	50
第40図	包含層出土遺物 II (1/3)	51
第41図	遺構検出面出土遺物 (1/1)	53

表 目 次

第1表	脇山地区圃場整備事業地内発掘調査年次別一覧表	1
第2表	脇山地区圃場整備事業に伴う発掘調査概要一覧表	4
第3表	栗尾B遺跡第1次調査焼土坑一覧表	43

図版目次

巻頭図版	脇山地区圃場整備事業地（南東上空から）	
図版1	脇山A遺跡(1)A区全景（上空から）	(2)B区全景（上空から）
図版2	脇山A遺跡(1)A区S X301（北から） (3)A区S X303土層（南から）	(2)B区S X208（北から） (4)B区S X212土層（東から）
図版3	脇山A遺跡(1)C-1区全景（上空から） (3)C-1区S K005（西から）	(2)C-1区S K004（南から）
図版4	脇山A遺跡(1)C-1区S K007（西から） (3)C-1区S X002（北西から）	(2)C-1区S K009（東から） (4)C-1区S X003（南から）
図版5	脇山A遺跡(1)C-2区全景（上空から） (3)C-2区S B903（東から）	(2)C-2区S B902（東から）
図版6	脇山A遺跡(1)C-2区S B905（西から） (3)C-2区S B910（北から）	(2)C-2区S B906（西から） (4)C-2区S B911（西から）
図版7	脇山A遺跡(1)C-2区S K498（西から） (3)C-2区S D419（西から）	(2)C-2区S K766（東から） (4)C-2区S D845・846（北から）
図版8	栗尾B遺跡(1)調査区全景（上空から） (3)S X006（東から）	(2)S K014（南から）
図版9	栗尾B遺跡(1)S X007（北西から） (3)S X019（東から）	(2)S X008（北から） (4)S X036（北から）
図版10	栗尾B遺跡(1)1～10グリッド（西から） (3)3・4グリッド遺物出土状況（東から） (4)3・4グリッド遺物出土状況（東から）	(2)1～10グリッド土層（南から）
図版11	脇山A遺跡(1)A区出土遺物	(2)B区出土遺物
図版12	脇山A遺跡C-1区出土遺物	
図版13	脇山A遺跡C-2区出土遺物	
図版14	栗尾B遺跡出土遺物	

付 図

- 付図1 脇山A遺跡第7次調査A区・B区・C-1区・C-2区遺構配置図 (1/200、1/300)
付図2 栗尾B遺跡第1次調査遺構配置図 (1/300)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市早良区大字脇山一帯の圃場整備事業が計画され、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に事業地内の埋蔵文化財の有無についての照会があったのは1984年（昭和59年）であった。翌年には、面積82.9haの事業地を対象に、1986年度から8ヶ年にわたり圃場整備が施行されることが決定した。

埋蔵文化財課ではこの事業に対応して、当該年度の事業地を試掘調査し、それに基づき遺跡の範囲を確定し、道路・水路などの構造物および削平を受ける田面について発掘調査を行うことにした。初年度の調査は1986年10月から始まり、以後1992年度まで継続している（第1表）。1992年度は4月13日から国庫補助（詳細分布調査）による試掘調査を開始した。これを基に事業者側と調整をはかり、調査対象面積を最小にして本調査に入った。

年度	事業面積	調査対象面積	調査期間	調査遺跡群
1986	4.5ha	5600m ²	1986.10.14～1987.1.14	脇山A（1次）
1987	5.0ha	7150m ²	1987.8.4～12.28	脇山A（2次）
1988	11.4ha	6636m ²	1988.9.26～12.15	脇山A（3次）
1989	14.4ha	144000m ²	1989.7.1～1990.2.28	脇山A（4次）、谷口
1990	14.4ha	18718m ²	1990.5.23～12.28	脇山A（5次）
1991	14.4ha	10904m ²	1991.4.1～10.14	脇山A（6次）、野中、大門
1992	12.0ha	8958m ²	1992.4.13～10.16	脇山A（7次）、栗尾B

第1表 脇山地区圃場整備事業地内発掘調査年次別一覧表

2. 調査組織

県営脇山圃場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備監理課 福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市脇山土地改良組合

調査主体

福岡市教育委員会文化財部 埋蔵文化財課

課長 折尾学

第1係長 乗高憲雄（前任）、横山邦雄

庶務 中山昭則

調査担当 清石哲也 桜木義嗣 尾山洋 常松幹雄

調査補助 笠原之 黒田和生

なお発掘調査が無事完了できたのは広瀬梓氏をはじめとする多数の作業員の方々、また県農林事務所、市農業土木課、改良区の方々のご協力のたまものである。深くお礼申し上げたい。

II. 遺跡の立地と環境

玄界灘に北面し、背後に脊振・三郡山系をひかえる福岡市には西から今宿、早良、福岡、粕屋の中小平野が展開する。これらの各平野は山系より派生する丘陵、山塊によって画され、古くから地理的、歴史的に独自の環境を有している。

今回報告する脇山A遺跡、栗尾B遺跡の位置する早良平野は西側を脊振山系から北に派生する飯盛、長垂山塊に、また東側を油山山塊によって区切られ、平野の中央には室見川が博多湾へと北流する。平野北辺部には砂丘が形成され、洪積台地が点在するが、その大部分は室見川を中心として金觸川、十郎川などの沖積作用によって形成される。この平野は早良平尾地区を要部とする扇形を呈するが、その南側奥部の脊振山麓には小扇状地が展開する。

なお、脇山A遺跡はこの扇状地上に位置し、栗尾B遺跡は脊振山より扇状地に向かって派生する丘陵上に位置する。

早良平野奥部の調査を概観し、歴史的環境について述べることとする。該地では本報告同様に圃場整備事業に伴う調査を中心として、その様相が逐一に判明してきた。まず、旧石器時代では脇山A遺跡第2次、3次調査でそれぞれ細石核、三稜尖頭器各1点が出土しているが、遺構は未確認である。縄文時代では脇山A遺跡をはじめ、谷口遺跡、野中遺跡等で早期から晩期に至る遺物が出土し、脇山A遺跡第5次調査では晩期の土坑が検出されている。弥生時代では上器が数点出土しているのみで、遺構の検出例は谷口遺跡の1例にとどまる。古墳時代においても脇山A遺跡第5次調査における6世紀の豊穴住居を除いては、遺物が少量確認されている程度である。奈良時代では脇山A遺跡の西側の丘陵先端部に位置する峯遺跡で掘立柱建物が検出されている。平安時代の前半には峯遺跡の谷を隔てた東側丘陵据部の内野原田遺跡で9世紀代の製鉄炉が確認されている。該地では平安時代の末以降になって比較的まとまった遺構がみられ始め、その中心をなすのは炭焼き用と考えられる焼土坑である。脇山A遺跡第4次、5次調査、峯遺跡では12世紀後半から13世紀代の掘立柱建物、土壙臺等が検出され、小規模ながら集落の存在が認められる。また該期には脊振山上宮東門寺の筑前国側山領としての支配下にあり、残存する文献史料との対比においても貴重な地域である。貞觀年間に紀伊國熊野より来た比丘尼が灌漑施設を築造し、新田開発に寄与したという伝承に基づいて一部現存する樋堰、樋溝、釣溝は該地の開発を考える上で興味深い。なお、実際の施設築造年代については文献史学の立場から長保4年（1460）を下限とする時期に比定されている。

参考文献 古良国光「脊振山の所領支配と村落—筑前国早良郡脇山を中心として—」『九州史学』特集号 1987
加藤一純・鷹取周成共編 「筑前国続風土記附録」（川添昭二他校訂） 文獻出版 1977



第1図 周辺道路分布図 (1/75,000)

III. これまでの調査経過

1. 1986年度～1991年度

該期の圃場整備事業に伴う発掘調査に関してはその大半が報告書の刊行がなされている。以下の一覧表に概要をまとめたので、参照されたい。

事業年度	調査遺跡名	主な遺構	主な出土遺物の時期	報文
1986	脇山A（1次）	中世土坑	縄文・古代・中世	①
1987	脇山A（2次）	_____	旧石器・縄文・弥生・中世	①
1988	脇山A（3次）	中世焼土坑・近世溝等	旧石器・縄文・中世	①
1989	脇山A（4次）	中世掘立柱建物・土坑・墓・鍛冶炉・焼土坑等	縄文・中世・近世	③
	谷口（1次）	弥生土坑・中世土坑・焼土坑・溝・旧道等	縄文・弥生・中世	②
1990	脇山A（5次）	縄文土坑・古墳竪穴住居・中世掘立柱建物・焼土坑等	縄文・古墳・中世	④
1991	脇山A（6次）	中世土坑・焼土坑等	縄文・弥生・中世	⑤
	大門（1次）	中世土坑・焼土坑等	縄文・古墳・中世	⑤
	野中（1次）	縄文土坑・中世掘立柱建物・焼土坑等	縄文・弥生・中世	未報告

①『脇山I』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第236集) 福岡市教育委員会1990年

②『脇山II』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集) 福岡市教育委員会1991年

③『脇山III』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第311集) 福岡市教育委員会1992年

④『脇山IV』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第312集) 福岡市教育委員会1992年

⑤『脇山V』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第344集) 福岡市教育委員会1993年

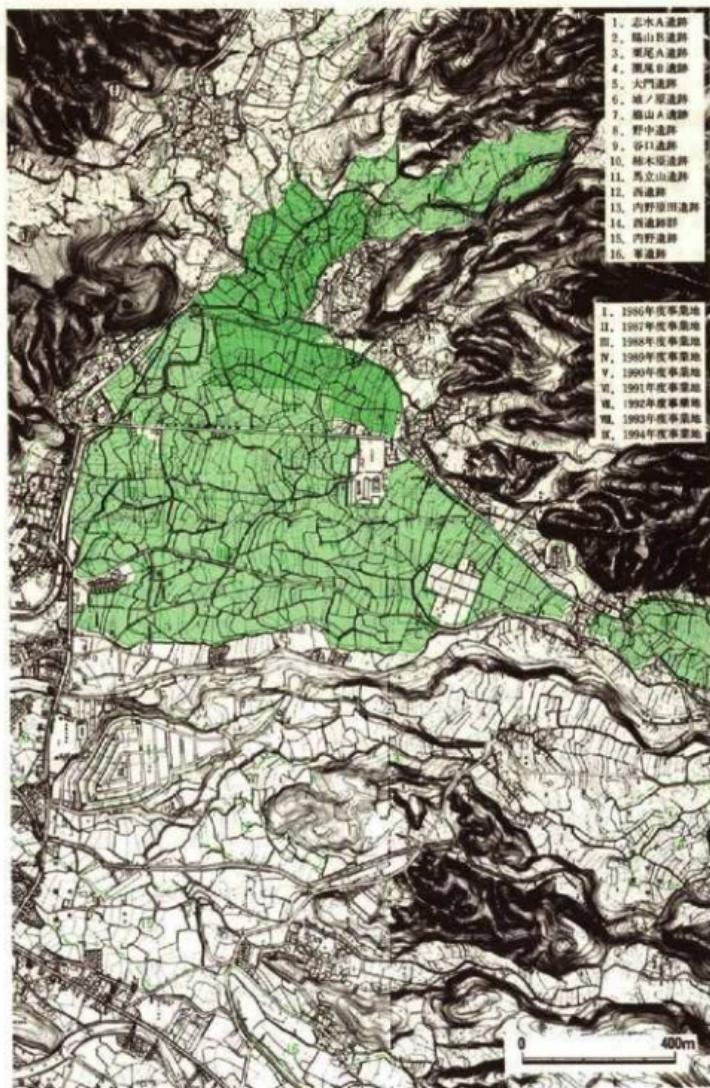
第2表 脇山地区圃場整備事業に伴う発掘調査概要一覧表

2. 1992年度

今回報告するのは当年度の脇山地区圃場整備事業に伴うものである。事業は昨年度に引き続き広田工区及びその西側の栗尾工区の一部において実施され、その事業総面積は12.0haである。前者は脇山A遺跡、後者は栗尾B遺跡の範囲に含まれており、既往の調査成果から縄文時代～中世の遺跡の広がりが予測された。

試掘調査 1992年4月13日から5月14日まで脇山地区圃場整備地内遺跡群詳細分布調査として実施した。この調査は遺跡の範囲、遺構の時代と性格、遺構面の深度等の確認を主たる目的とするもので、重機による試掘トレンチを既存の田面に平行もしくは直交する形で堀削し、遺構・土層の略図作成及び写真撮影を行った。総数78本のトレンチを開け、以下の結果を得た。

広田工区では蛇行し、北流する数本の旧河川を確認するとともにその中洲状の舌状に延びる微高地に中世と考えられるピット、土坑、焼土坑を確認した。また、栗尾工区では全体的に



第2図 駒山地区圃場整備年次事業地及び遺跡群 (1/15,000)

遺構の密度は薄いが、焼土坑の集中して分布する箇所が認められ、縄文時代の遺物を採集した。埋蔵文化財課ではこれらのデータを基に事業計画に掲げる調査域を提示し、事業者との協議・調整を行った上で、当年度の調査地を決定した。

本調査 広田工区での調査地は駒山A遺跡第7次調査、栗尾工区での調査地は栗尾B遺跡第1次調査に該当する。5月20日より重機による表土剥ぎ取りを開始し、駒山A遺跡のC-1区より調査に着手した。中世の土坑、焼土坑等を確認し、当区の調査と一部並行して東接するC-2区の調査も始めた。試掘調査でも確認されたようにピット群が検出され、該地としては比較的まとまりのある中世集落の様相を把握できた。6月末にはC-1区の調査が終了し、A区、B区の調査をC-2区と並行し開始した。両区では焼土坑を中心として検出した。8月中旬によりA、B、C-2区の図面作成を行いながら、栗尾B遺跡の調査へと移行し、焼土坑及び縄文時代の包含層等を確認した。10月上旬には全調査が終了し、10月16日に撤収を行った。

3. 1993年度

駒山地区圃場整備事業は当初の事業計画によると当年度を最終年度とするものであった。しかし事業者の諸般の事情により、1年度事業延期が決定した。

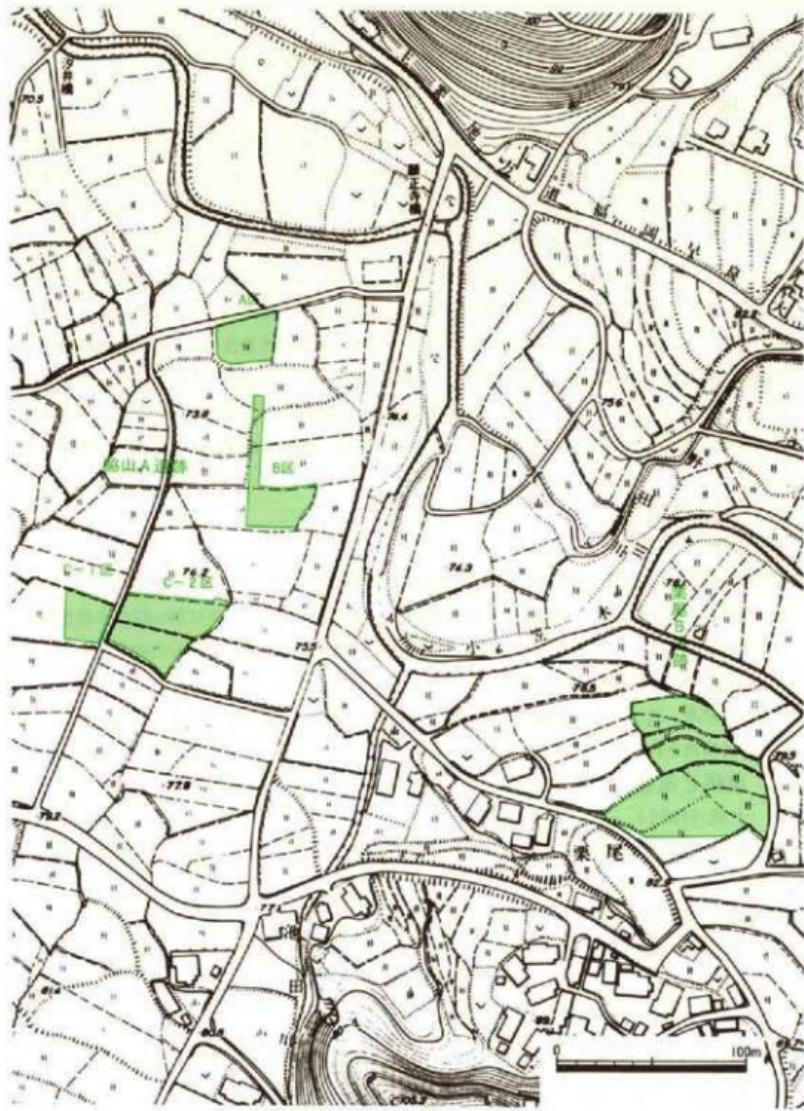
1993年4月16日から4月30日まで当年度の事業地である栗尾工区の試掘調査を実施した。前述した92年度の栗尾工区の南側に当たり、脊振山より北に脈生する丘陵及びその裾部に立地する。当事業地は栗尾A遺跡及び栗尾B遺跡に含まれ、計33本の試掘トレンチを開削した。

その結果、該地は棚田造成のため黄褐色粘質土である遺構面が著しく削平されており、遺構の遺存状況は極めて悪いことが判明した。削平の比較的少ない田面で土坑、焼土坑を数基確認した程度で、面的な遺構の広がりは認められなかった。また、採集した遺物も希少であった。以上の試掘成果から埋蔵文化財課では当年度の事業地内での本調査への移行の必要性はないとの判断した。

事業最終年度である94年度分の事業地の試掘調査も当年度に実施したので、概要を報告する。1993年10月27日から11月8日の期間に行なった。該地は栗尾B遺跡の一部に含まれ、92年度工区の更に南側の栗尾川を挟む丘陵斜面上に立地する。計23本の試掘トレンチを開けた。

栗尾川西側の丘陵斜面は棚田造成により削平が著しく遺構は未検出に終わった。東側丘陵部では該地のはば中央部に浅い谷部を確認し、その両側斜面に焼土坑を検出した。その分布は密ではないが、広く確認された。構造物施工箇所及び切り土田面に該当するトレンチ内の遺構については掘り下げ、図面・写真的記録作成を行った。

以上の成果から事業者に対して埋蔵文化財課では焼土坑が比較的広範囲に認められることと、上述したように現事業計画図の出来高に掲げ、遺構の削平される箇所のみの調査をおこなっていることより、計画出来高の遵守を指導し、本調査を実施しないことを伝えた。



第3図 路山A遺跡第7次・栗尾B遺跡第1次調査区位置図 (1/3,000)

IV. 脇山A遺跡第7次調査の記録

1. 概要

今回の調査区は脇山A遺跡が展開する扇状地の東側扇尖部から扇端部にかけて位置し、標高は71~75mを測る。前述した様に構造物施工箇所及び切り土田面を対象として、3,894m²を調査した。調査区は大きく3調査区に分かれ、北側からA区、B区、C(-1、-2)区の調査区名を付した。「III.これまでの調査成果」でも述べたが、試掘調査の結果、扇状地上には蛇行する旧河川が認められ、A区・B区はその河川の縁部に該当する。C区は旧河川に挟まれた舌状の安定した微高地上に立地する。A区・B区ではこれまでの調査でも広く確認されている焼土坑を主に検出し、C区では第3・4次調査に続き比較的まとまった中世集落を検出した。なお、遺構番号は原則的に調査順の3桁の通し番号を用いた。A区は301、B区は201、C-1区は001、C-2区は401からそれぞれ番号を付しており、各区に遺構番号の重複はない。報告にあたっても調査時の遺構番号に遺構略号を付し、使用している。以下、A区から順に検出遺構と出土遺物の報告を行う。

2. A区の調査

1) 概要

A区は今年度の調査区の北端にあたる。用水路及び田面の削りに伴い775m²を調査した。調査区の標高は北側で71.06m、南側で71.03mを測る。調査地点は表土の下に20cm程の灰褐色砂質土が堆積している。その下が黄色の砂質土で、多量の礫を含む部分があるものの安定して広がっており、この面で遺構が検出された。

調査の結果、検出された遺構は土坑2基、焼土坑4基、旧河川1条である。ピットは全体的に疎らに検出されたが、特にまとまりはみられない。

2) 遺構と遺物

(1) 土坑(付図1)

SK302 SX303の東側に位置する。楕円形のピット状を呈し、107×65cmを測る。深さは18cmを測る。遺物の出土なし。

SK306 調査区のはば中央に位置する。円形のピット状を呈し、85×78cmを測る。深さは5cmを測る。遺物の出土なし。

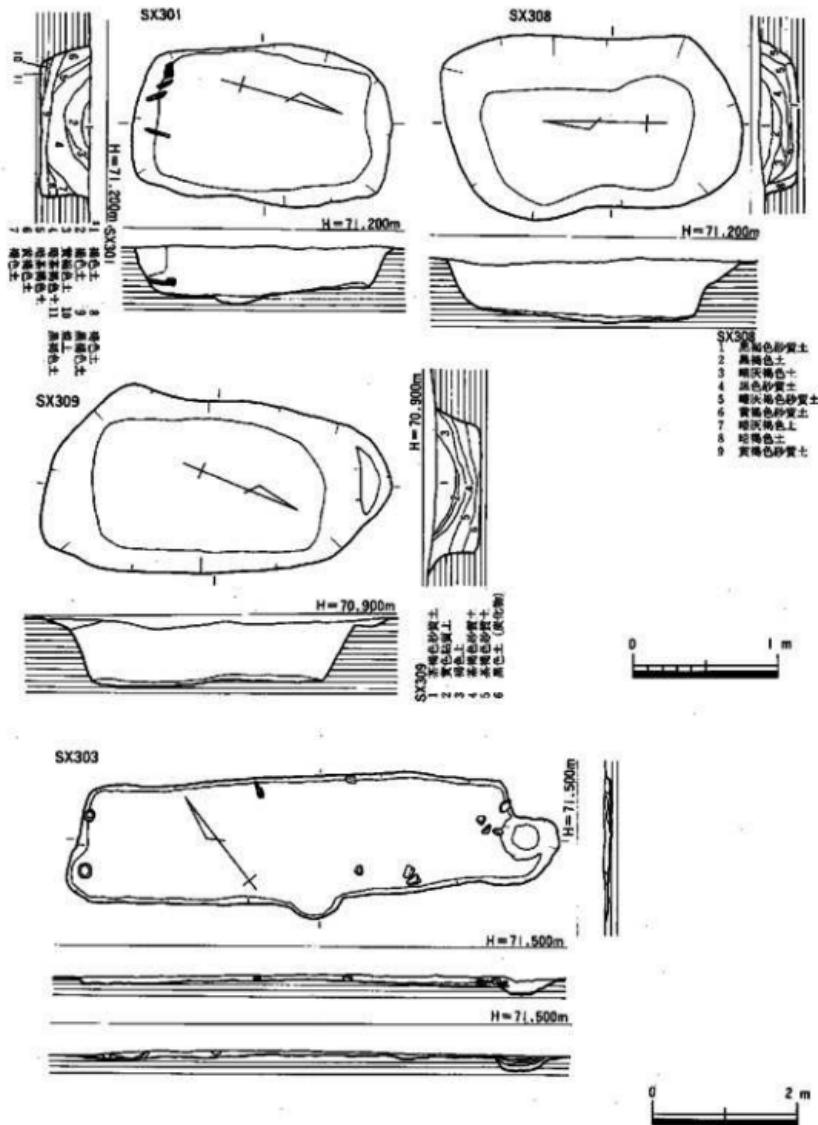
(2) 焼土坑

4基を検出したが遺物の出土はなかった

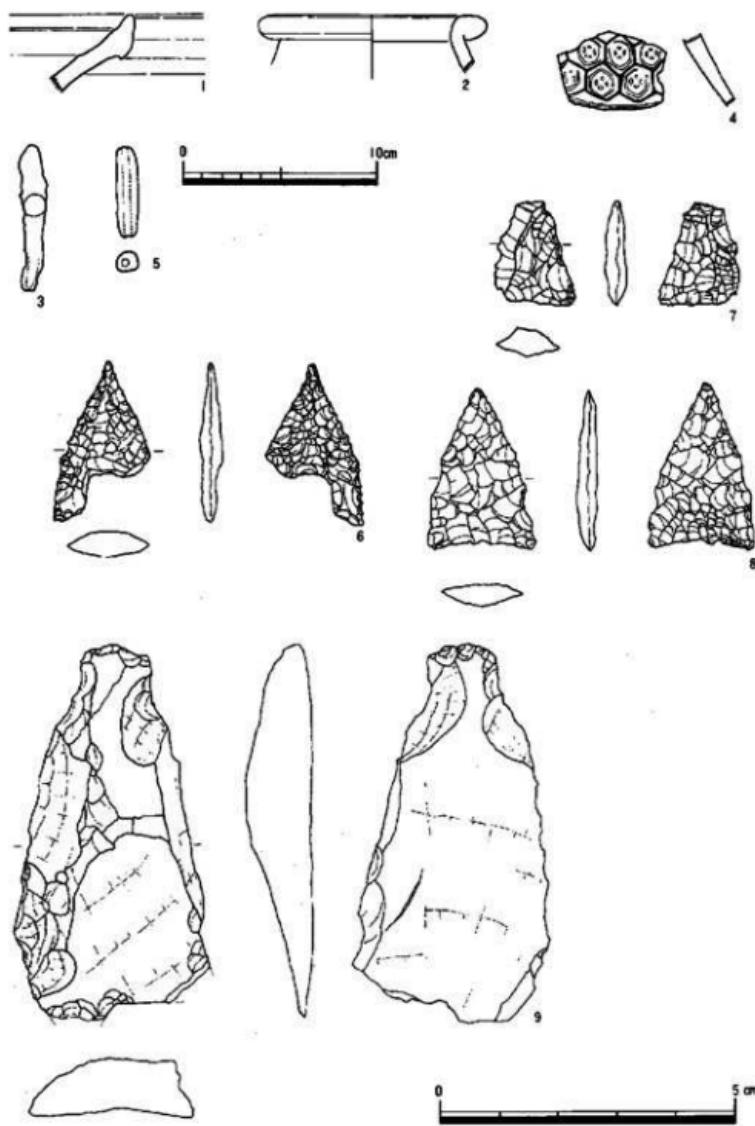
SX301(第4図) 陽丸長方形を呈す。180×113、深さ39cmを測る。南側の壁が焼けている。

SX303(第4図) 654×157cmと長大である。深さ8cmを測る。東端に円形の窪みを有す。

SX308(第4図) 陽丸長方形を呈す。208×128、深さ42cmを測る。



第4図 SX301・303・308・309実測図 (SX303は1/80、他は1/40)



第5図 A区出土遺物実測図 (1~5は1/3、他は1/1)

SX309(第4図) 構円形を呈す。238×129cmを測る。北側にテラスを有す。

(3) 旧河川(付図1 SD310)

調査区の東南部から西へながれ、途中で北に流れを変えている。埋土は褐色砂で途中に砂礫層を有す。

出土遺物(第5図1~3・6) 1は須恵質の鉢である。口縁部外面に自然釉がかかる。胎土は粗い。焼きは良好である。2は陶器の無形壺である。胎土は灰白色を呈し、緻密でセメントを思わせる。全体に茶褐色の薄い釉がかかり鈍い光沢がある。3は鉄釘である。長さ7.4cmを測る。6は黒曜石製の石鏃である。

(4) その他の遺物(第5図4・7~9)

遺構検出時に数点の遺物が出土した。4は高麗青磁の壺である。胎土は灰色の須恵質である。表面は黒で蜂の巣状の模様を描き、中には白で六角形と中心に点を4つうっている。画面とも薄緑色の胎が薄くかかるが熱の為に発泡している。5は管状土錐。長さ4.6cm、径1.1cmを測る。胎土は精良であるが、焼きはあまり。7・8は黒曜石製の石鏃である。9は安山岩製の石匙である。その他に糸切りの上師皿・口先の白磁皿の小片や鉄鋤が出土している。

3. B区の調査

1) 概要

B区はA区の南側に接する。用水路及び田面の削りに伴って1,043m²を調査した。調査区は耕作土の直下に黄褐色の砂質土が安定して広がっており、遺構はこの面で検出される。調査区の標高は北側で71.96m、南側で73.47mを測る。本調査の結果土坑7基、焼土坑11基、溝2条、ピット群、旧河川を検出した。遺構のはほとんどは遺物が出土していない。

2) 遺構と遺物

(1) 土坑(付図1)

SK206 不整形の方形を呈す。109×100、深さ26cmを測る。礫群の中にあり、底部にも礫が露出している。埋土は暗褐色で白色砂を多く含んでいる。床面から土器の小片が出土した。

SK207 構円形を呈す。97×58、深さ19cmを測る。埋土は暗褐色で炭化物を含んでいる。中央部と北側にピット状の窪みを有す。遺物は出土していない。

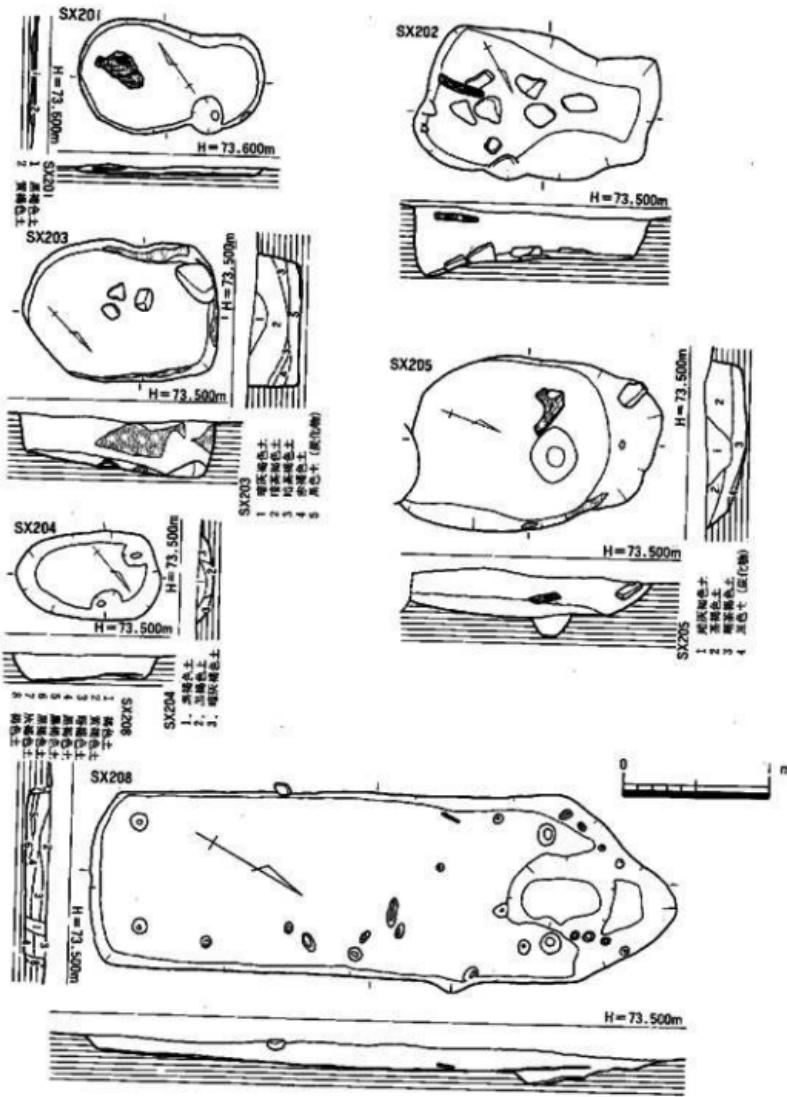
(2) 焼土坑

SX201(第6図) 長方形を呈す。131×63、深さ3cmを測る。南端にピット状の孔を有す。

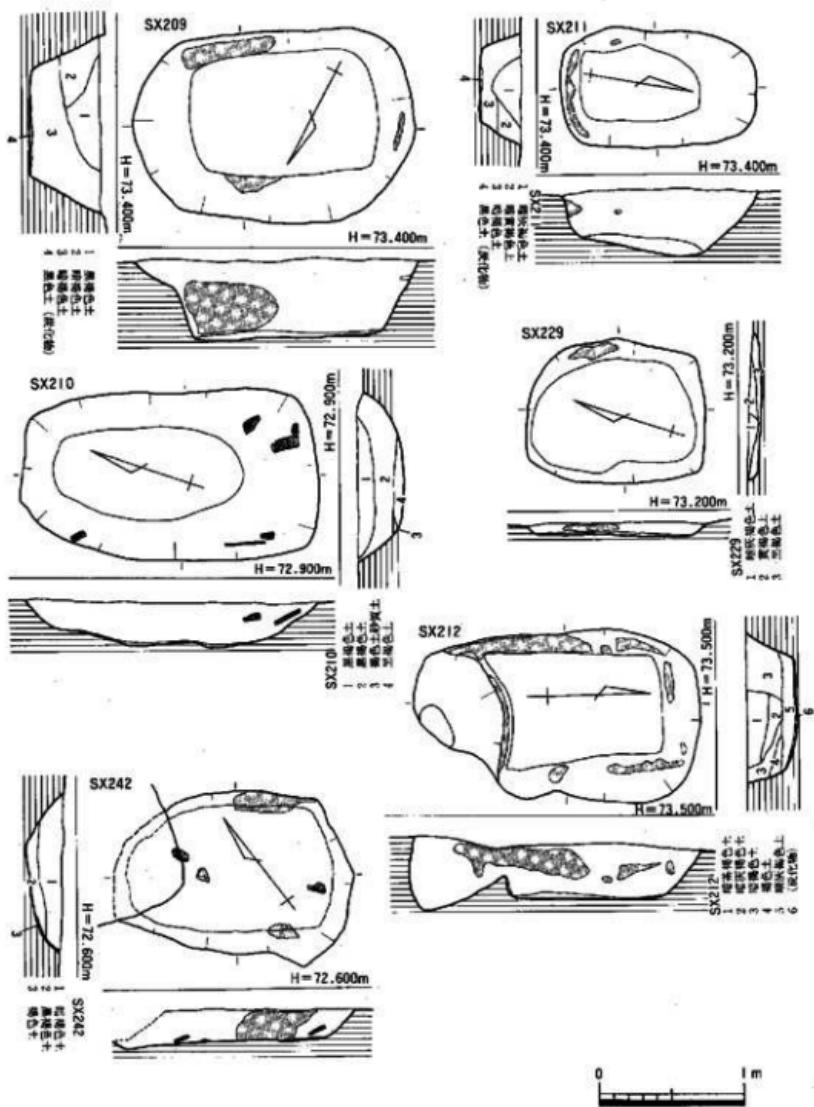
SX202(第6図) 長方形を呈す。162×98、深さ9cmを測る。東側の壁が一部赤変する。礫群中に位置し、遺構床面にも礫が露出する。

SX203(第6図) 隅丸長方形を呈す。99×89、深さ31cmを測る。東側を除く3方の壁に赤変が見られる。礫群中に位置し、床面に礫が露出する。

SX204(第6図) 隅丸長方形を呈す。86×61、深さ12cmを測る。窪み上の穴を2つ有す。



第6図 SX201～205・208実測図 (1/40)



第7図 SX209~212・229・242実測図 (1/40)

SX205(第6図) 隅丸長方形を呈す。162×121、深さ28cmを測る。北側の壁が赤変している。糸切りの土師皿の小片が出土。

SX208(第6図) 長方形を呈す。202×64、深さ12cmを測る。ピット状の穴と北西側に窪みを有す。

SX209(第7図) 長方形を呈す。97×66、深さ28cmを測る。壁が一部赤変する。瓦器 小片が出土。

SX210(第7図) 長方形を呈す。101×58、深さ14cmを測る。

SX211(第7図) 長方形を呈す。132×68、深さ29cmを測る。壁が一部赤変する。

SX212(第7図) 長方形を呈す。99×59、深さ17cmを測る。周囲の壁が赤変する。南側に窪みを有するが、土層から南側2/3は後ろからの掘り込みであると思われる。

SX220(第7図) 長方形を呈す。125×101、深さ11cmを測る。壁が一部赤変する。

SX242(第7図) 長方形を呈す。83×59、深さ14cmを測る。壁が一部赤変する。

(3) 溝(付図1)

SD230 調査区の西南に位置する。584×65、深さ3cmを呈する。埋土は暗褐色土で炭化物をわずかに含む。底面に窪み状の穴がある。出土遺物には糸切りの土師皿小片がある。

SD241 調査区の北側に位置する。490×29、深さ9cmを測る。埋土は灰褐色を呈し、炭化物を僅かに含む。出土遺物はなし。

(4) ピット群(付図1)

調査区全体に分布するが、まとまりはみられない。

出土遺物(第8図11) 11は縄文粗製深鉢の屈曲部である。外面は暗赤褐色で条痕調整、内面は暗茶褐色で丁寧なナデ調整を施す。

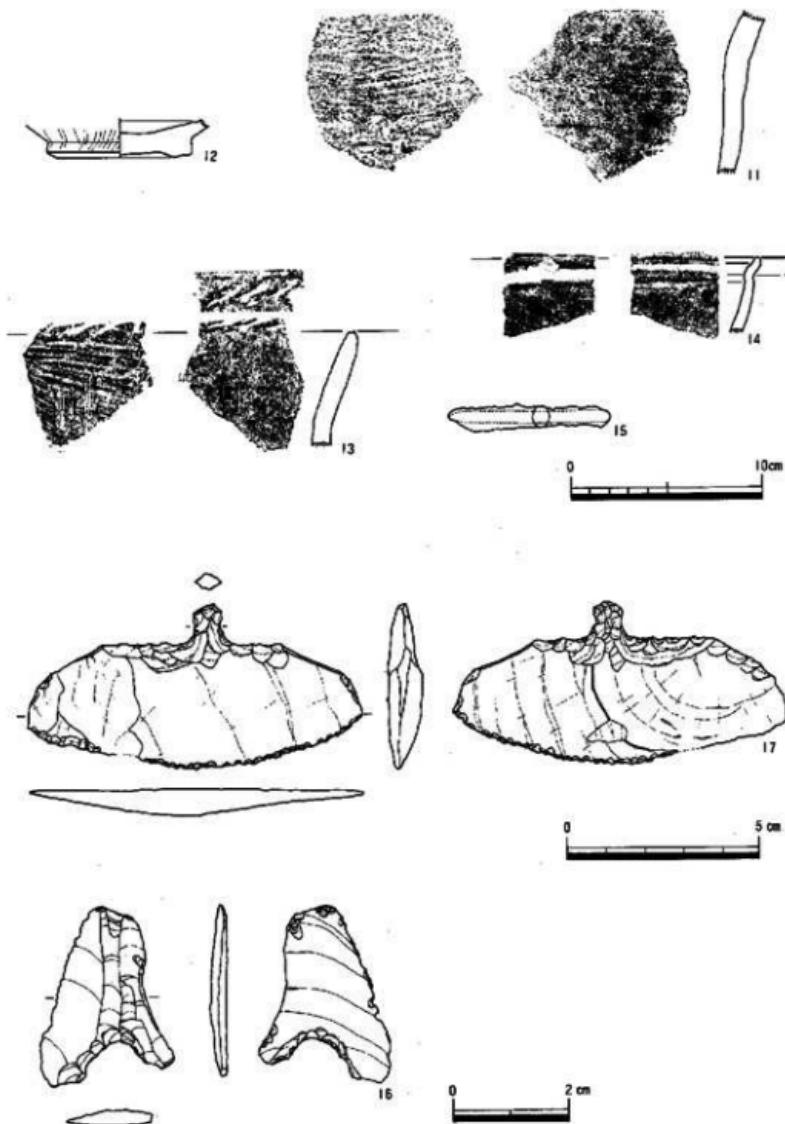
(5) 旧河川(付図1)

調査区の西南端と北側で検出した。北側の河川の埋土は暗茶褐色の砂質土。南側河川は灰白色の砂質土で下層は砾を多く含む。

出土遺物(第8図16) 黒曜石製の石鏃である。北側河川の上層で出土した。

(6) その他の遺物(第8図12~15・17)

遺構検出時に数点の遺物を採取した。12は白磁碗である。釉は灰白色で非常に薄い。胎土は灰白色でやや粗雑である。14は精製浅鉢の口縁で外面は黒褐色、内面は暗黄灰褐色を呈する。内外面ともやや粗いナデ調整を施す。13は粗製深鉢の口縁である。器壁は肉厚で外面は暗赤褐色、内面は暗褐色でナデ調整を施す。15は鉄釘である。長さ7.9cmで径は3~5mm程度を測る。17はサヌカイト製の石匙である。



第8図 B区出土遺物実測図 (17は2/3、16は1/1、他は1/3)

4. C-1区の調査

1) 概要

本調査区は遺跡の東端に位置し、第6次調査の5地点に東接する。田面の削りに伴い541m²を調査した。耕作土、床土下の黄褐色土が遺構面となり、調査区の東側では礫が露出する。北に向かって緩く傾斜し、遺構面の標高は75.7m前後を測る。検出した主な遺構は土坑、溝、焼土坑、ピットである。

2) 遺構と遺物

(1) 土坑

調査区の中央北側で不整な方形プランを呈する中世の大型の竪穴状土坑が集中して検出された。同遺跡内では第3次調査の12地点、第6次調査の2地点に類例が認められる。ここでは他の土坑も含め11基を報告する。

SK001(第9図) 調査区の西端に位置し、SX002を切る。やや不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.4m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。西側に平坦面を有する。龍泉窯系の青磁碗、回転糸切り底の土師器小皿等の細片が少量出土している。

SK004(第9図) 調査区の中央やや北側に位置する隅丸方形の竪穴状の土坑である。SK021に切られ、SK012を切る。南北長3.5m、東西長3.3m、深さ0.1mを測り、壁面は緩やかに立ち上がる。床面にはピットが2個掘り込まれる。覆土には炭化物が認められた。

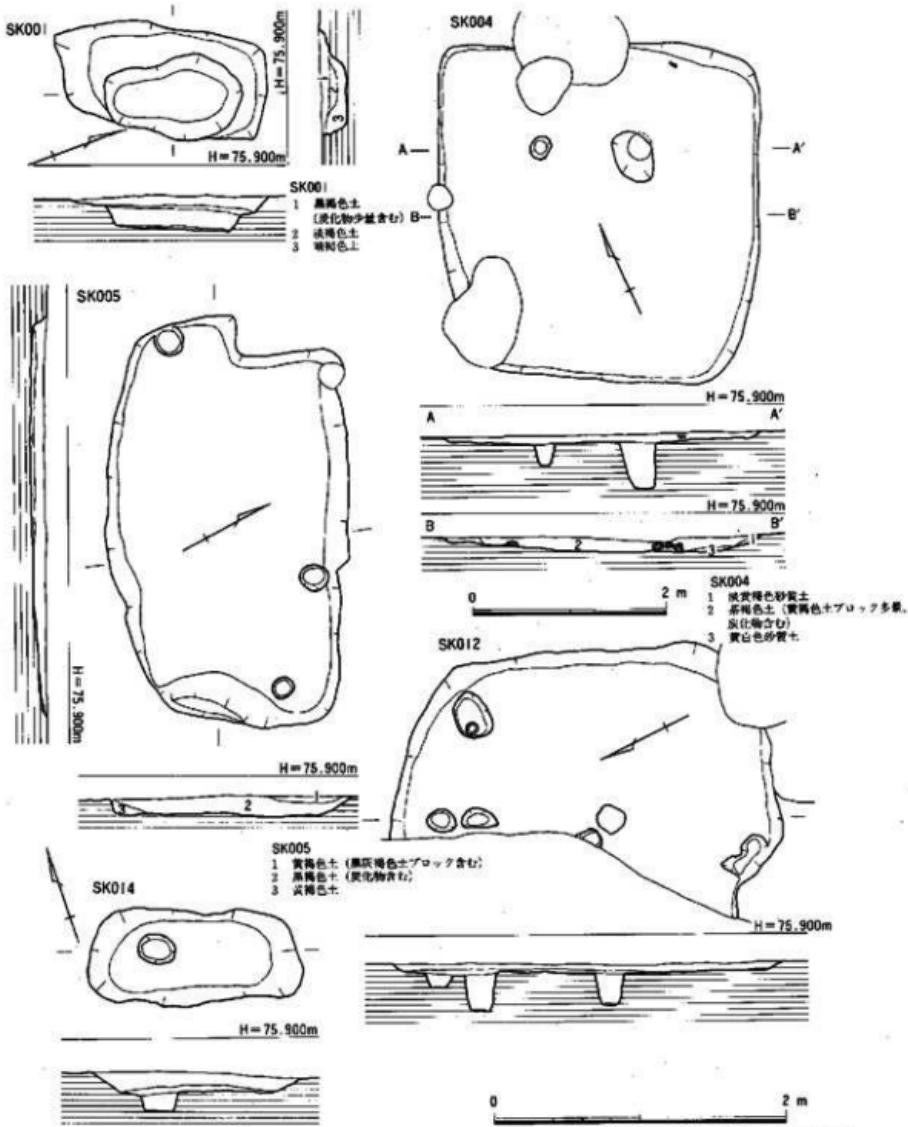
出土遺物(第12図18・19) 18は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。外面に輪廻弁を有する。釉色は暗オリーブ色。19は鉄製の刀子で刃部の先端及び茎部の基部を欠失する。残存長7.5cm、刃部幅2.0cm、厚さ0.3cmを測る。銹化著しい。他に出土遺物としては回転糸切り底の土師器小皿・壺等の細片が少量ある。

SK005(第9図) SK004の西約1mに位置する竪穴状の土坑で、隅丸長方形を呈するが、南西隅部に0.4m程の突出部を有する。長さ4.2m、幅2.5m、深さ0.2mを測る。壁周辺の床面に深さ10~15cmのピットが3個掘り込まれる。覆土には炭化物を含む。

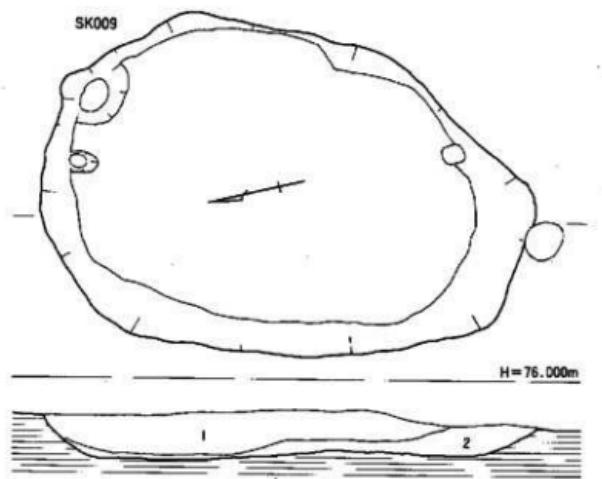
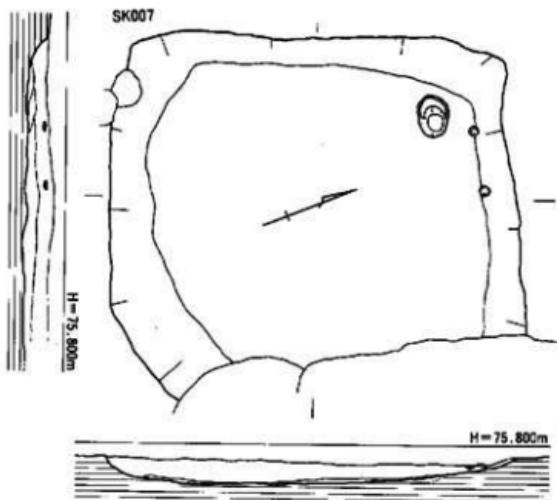
出土遺物(第12図20・21) 共に回転糸切り底の土師器小皿で、復元口径9.9cmを測る。順に器高は1.0、1.1cmを測り、21は板状压痕を有する。他に土師器、白磁、青磁の細片が出土している。

SK007(第10図) SK005の北約1mに位置する竪穴状の土坑である。東側を土坑及びトレンチに切られ全容を明確にし得ないが、隅丸の方形を呈すると考えられる。南北長4.2m、深さ30cmを測り、壁面は緩やかに立ち上がる。北東隅に深さ40cmのピットが認められる。覆土は淡茶褐色土で黄褐色土のブロック、炭化物、焼土を含む。

出土遺物(第12図22~27) 22~24は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で板状压痕は無い。順に口径は8.2、8.8、9.3cmで、器高はいずれも1.2cmである。25は土師器壺で復元口径



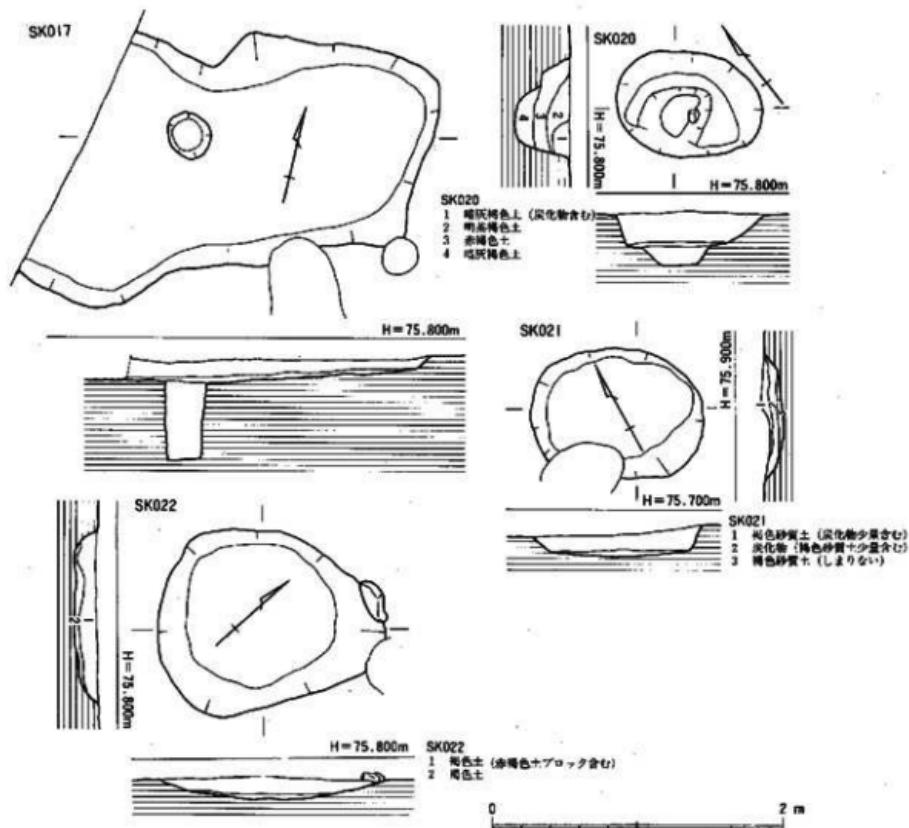
第9図 SK001・004・005・012・014実測図 (SK001・014は1/40、他は1/60)



SK009
 1 赤褐色土(灰褐色土及び黒褐色土ブロック含む)
 2 灰褐色土(赤褐色土ブロック多量含む)

0 2 m

第10図 SK007・009実測図 (1/60)



第11図 SK017・020・021・022実測図 (1/40)

13.0cm、器高2.3cmを測る。底部は回転糸切りで、板状圧痕は無い。26は口禿の白磁皿で口径9.9cm、器高2.0cmを測る。外底部にも施釉されるが、部分的に露胎となる。内底部見込みに沈線状の段を有する。24・26は完形品で北壁沿いの床面より10cm程浮いた状態で出土した。27は安山岩製の石鑊でU字形の抉りを有する。先端部と脚部の一部を欠失する。混入品と考えられる。他に土師器、白磁、青磁等の細片が出土している。

SK009(第10図) SK007に東接する豈穴状の土坑で西半部はトレンチによって削平される。不整な橢円形を呈し、長径5.0m、短径3.4m、深さを測る。断面は浅皿状をなす。北西側の壁面に

深さ40cmのピットが掘り込まれる。覆土には炭化物を含む。

出土遺物(第12図28・29) 28は土師器小皿で、復元口径7.8cm、器高1.1cmを測る。回転糸切り底で板状圧痕は無い。29は滑石製の容器で体部に下向きの注口を有するが、上部から横部を欠失する。体部と底部の境界付近にノミによる削痕が残る。復元口径は6.4cmを測る。

SK012(第9図) SK009に西半部を、また南端部をSK004・021に切られる。隅丸の方形を呈すると推定される。南北長4.0m、深さ0.1mを測り、緩やかな壁面を有する。

出土遺物(第12図30) 土師器小皿で、復元口径8.2cm、器高1.0cmを測る。回転糸切り底で板状圧痕は無い。他に同様の土師器の細片が少量出土している。

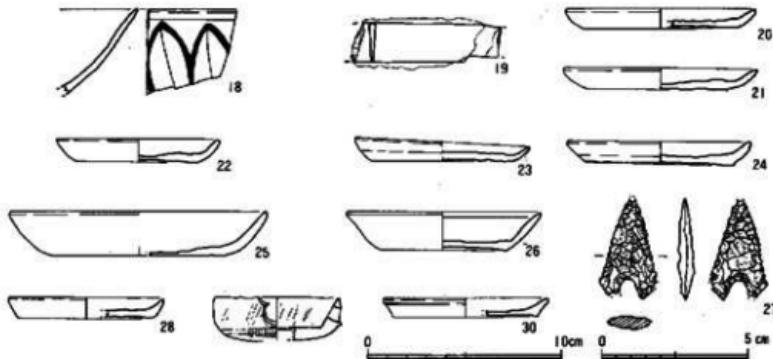
SK014(第9図) SK005の南1.5mに位置する。隅丸の長方形を呈し、長さ1.5m、幅0.8m、深さ0.15mを測る。西側床面にピットが掘り込まれる。出土遺物は無い。

SK017(第11図) 調査区の西端に位置し、東半部は調査区外に延びる。不整な隅丸長方形をなすと推定される。現存で長さ2.8m、幅1.75m、深さ0.15mを測る。回転糸切り底の土師器皿、陶器等の細片が少量出土している。

SK020(第11図) SK007の北に位置し、楕円形を呈する。長径1.0m、短径0.7mを測る。二段掘りで最深部の深さは0.35mを測る。出土遺物には回転糸切り底の土師器小皿、須恵質土器等の細片が少量ある。

SK021(第11図) SK004・012を切る。楕円形を呈し、長径1.2m、短径0.9m、深さ0.15mを測る。覆土には炭化物を含む。出土遺物は無い。

SK022(第11図) SK004の東に位置し、不整な長方形を呈する。長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.15mを測る。遺物は土師器片が少量出土したにとどまる。



第12図 SK004・005・007・009・012出土遺物実測図 (27は1/2、他は1/3)

(2) 溝

SD009 調査区の東端部から北端部にかけてL字状に延び、断面は逆梯形を呈する。深さは10~15cmを測り、北に緩く傾斜する。片側の肩部は調査区外に位置するため幅は不明である。覆土は茶褐色土で、明黄褐色土のブロックを含む。

出土遺物(第13図31) 龍泉窯系の青磁碗で、復元口径15.4cmを測り、外面に鋪蓮弁が施される。釉色は淡緑色、胎土はやや粗い灰白色である。他に回転糸切り底の土師器等の細片が出土している。

(3) 焼土坑

SX002(第14図) 調査区西端に位置し、SK001に切られる。隅丸の長方形を呈し、長さ1.35m、幅0.7m、深さ0.15mを測る。壁面及び床面の一部が焼ける。床面上には炭化物層が認められ、木炭が散在する。土師器の出土遺物は無い。

SX003(第14図) 調査区北東隅に位置する。やや不整な隅丸長方形を呈し、長さ2.0m、幅1.2m、深さ0.45mを測る。壁面及び床面より10cm程上が焼ける。床面上には炭化物層が見られた。瓦器、土師器の細片が少量出土している。

SX006(第14図) 調査区の略中央に位置する。不整な楕円形を呈する小型の焼土坑で、長径1.1m、短径0.85m、深さ0.3mを測る。壁面の極一部が焼ける。出土遺物は無い。

SX008(第14図) 調査区の東端に位置し、隅丸の長方形を呈する。長さ1.8m、幅1.2m、深さ0.35mを測る。壁面は焼ける。床面にはピット状の掘り込みが認められ、木炭が西側に遺存していた。断面は直状をなす。出土遺物は無い。

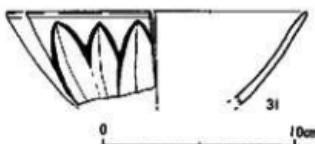
SX016(第14図) 調査区の中央西寄りに位置する。隅丸の長方形を呈し、長さ1.8m、幅1.0m、深さ0.2mを測る。北側壁面の一部が焼ける。床面には深さ15cmのピットが掘り込まれる。

出土遺物(第14図32) 土師器小皿で、東側壁面付近の上面で出土した。口縁部を1/3程度欠失する。復元口径8.8cm、器高1.4cmを測る。回転糸切り底で、板状压痕は認められない。歪みが著しい。他に同様の土師器、青磁等の細片が少量出土している。

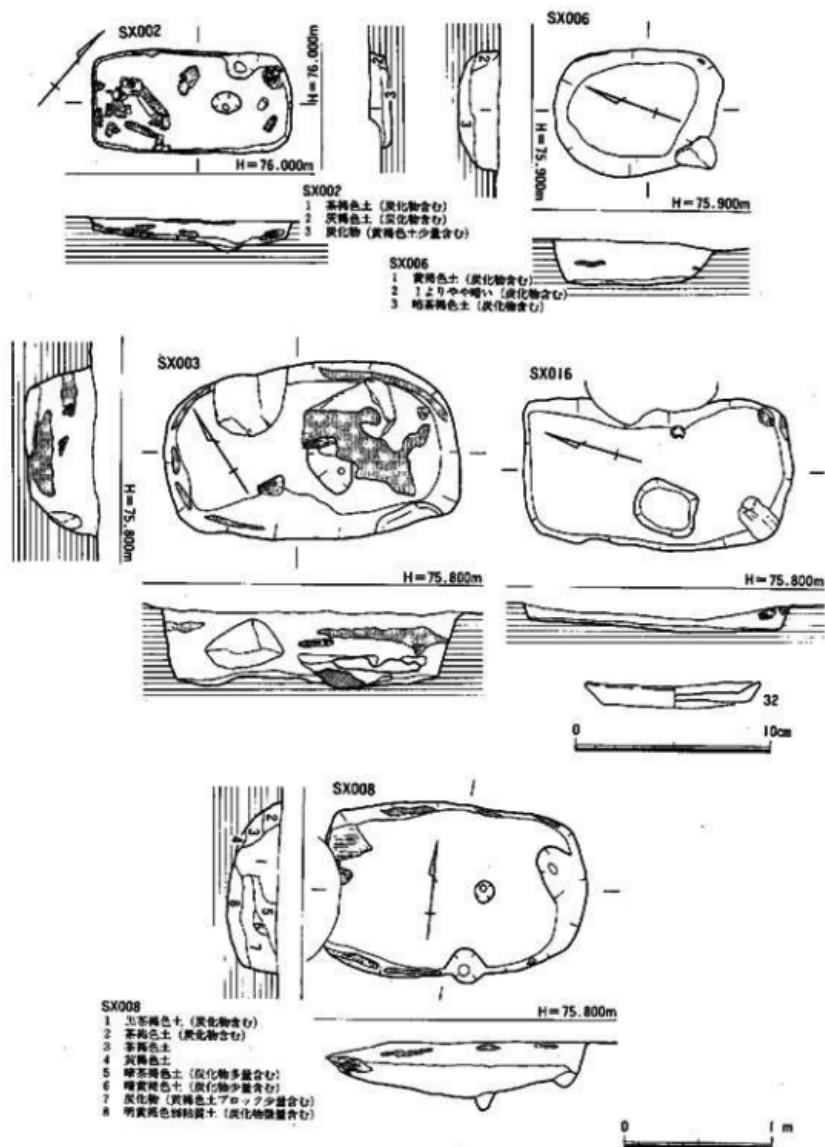
(4) その他の遺構と遺物(第15図33~45)

ここではピット出土及び遺構検出時に採集した遺物を取りまとめて報告する。

33は調査区の中央北寄りのSP062から出土した土師器甕である。復元口径25.2cmを測る。肩の張る肩部から外反する口縁部を有する。外面は斜方向の刷毛目を施し、口縁部ではそれをナデ消す。また一部叩きが見られる。内面は磨減しており、器壁が一部剥離する。内外面ともに明黄褐色を呈する。35・36はSK005の北に位置するSP065より出土した山形文を施文する押型文土器の口縁部片である。35は外反する口縁部の外面に縱走施文する。口唇部にも施文を行なう。

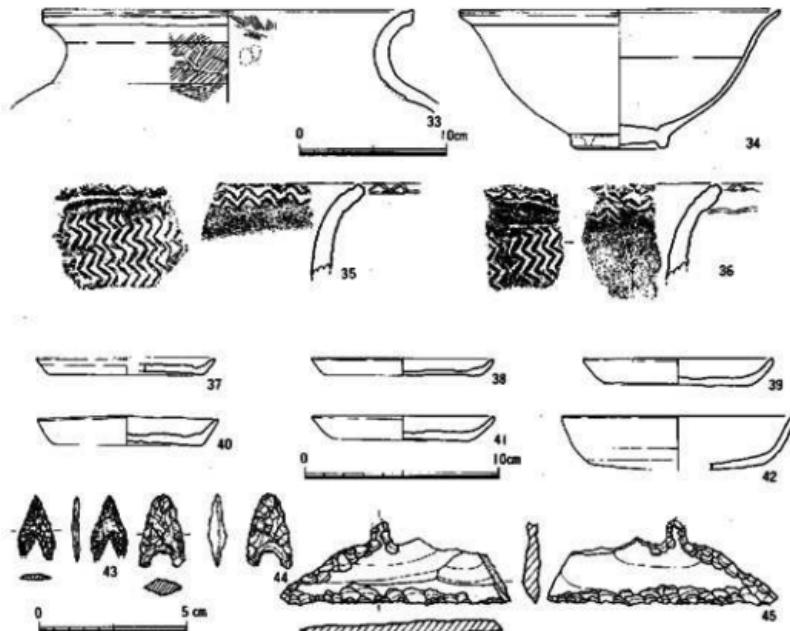


第13図 SD099出土遺物実測図 (1/3)



第14図 SX002・003・006・008・016実測図 (1/40) 及びSX016出土遺物実測図 (1/3)

また内面は2条の横走施文が見られる。胎土には石英粒を多量に混入し、色調は外面が褐色、内面がによい黄橙色を呈する。焼成は良好。36は35同様に外反する口縁部の外面に縱走施文を行うが、口縁下に粘土で幅1.0~1.5cm程肥厚させ無文帯を設ける。口唇部にも施文し、内面には最大で4条の横走施文を行なう。胎土には石英粒を混入し、色調は内外面ともに褐色を呈する。焼成は良好。37~42は調査区の北西のSP097から出土した。37~41は十師器小皿で、復元口径は順に8.8、9.2、9.4、9.1、9.2cmを測り、平均値は9.14cmである。また器高は0.9、0.9、1.4、1.5、1.4cmを測り、平均値は1.24cmである。全て回転糸切り底で、38・40には板状圧痕が認められる。41は口縁部端を一部欠失するが、略完形である。42は土師器坏で復元口径11.8cmを測る。底部の切り離し技法は不明。34~43~45は造構検出時に採集した遺物である。34はU字型の白磁碗で、復元口径16.4cm、器高7.2cmを測る。内面体部上位と見込み部には沈線を有する。前者は浅く途切るもので、後者は深く鋭い段上をなす。体部と高台部の境まで施釉されるが、一部高台に釉垂れする。釉色はやや青味がかった灰白色である。43・44は石鐵である。43は黒曜石製で、深いV字形の抉りを有する。44は安山岩製でU字形の抉りを有する。45は安山岩製の横長剝片を用いた横形の石匙である。



第15図 C-1区ピット及び造構検出面出土遺物実測図 (33は1/4、43~45は1/2、他は1/3)

5. C-2区の調査

1) 概要

本調査区はC-1区に東接する。田面の削りに伴い1,535m²を調査した。耕作土、床土下の黄褐色土が遺構面の主体となるが、田面造成時に削平の行われている西側では黄褐色の砂質土が見られ、一部礫が露呈する。前述したC-1区の田面との比較差は現況で約0.4mである。調査区は東側及び北側に緩く傾斜しており、遺構面の標高は74.8~75.1mを測る。検出した主な遺構は掘立柱建物、土坑、溝、焼土坑である。

2) 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

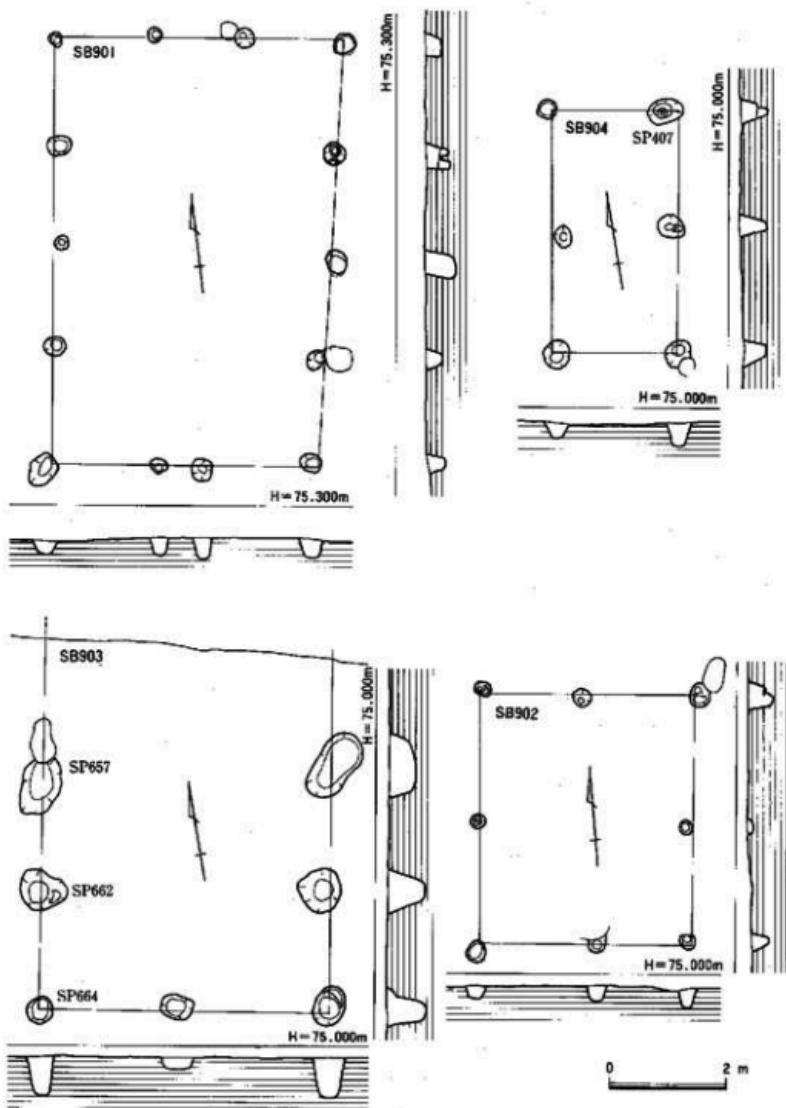
調査区の東側の一部を除いて多數のピットが検出された。特に中央部から南側では重複が著しくその数も顕著である。一部図上復元も含め、12棟の掘立柱建物を確認した。SB908・912を除いては建物の主軸方向が類似する。

SB901(第16図) 調査区の北西で検出した。主軸方向をN-7°-Eにとる3間×4間の側柱建物である。梁間は全長5.1、4.5mと南側が短く、柱間は1.8~2.0mである。桁行は全長7.2mで、柱間は北側で1.5、1.8m、南側では0.9、1.8mと不規則である。柱穴は円形又は楕円形で、径20~55cm、深さ20~50cmを測る。覆土は暗茶褐色土を主体とする。出土遺物には糸切り底の土師器小皿、土鍋等の細片が少量ある。

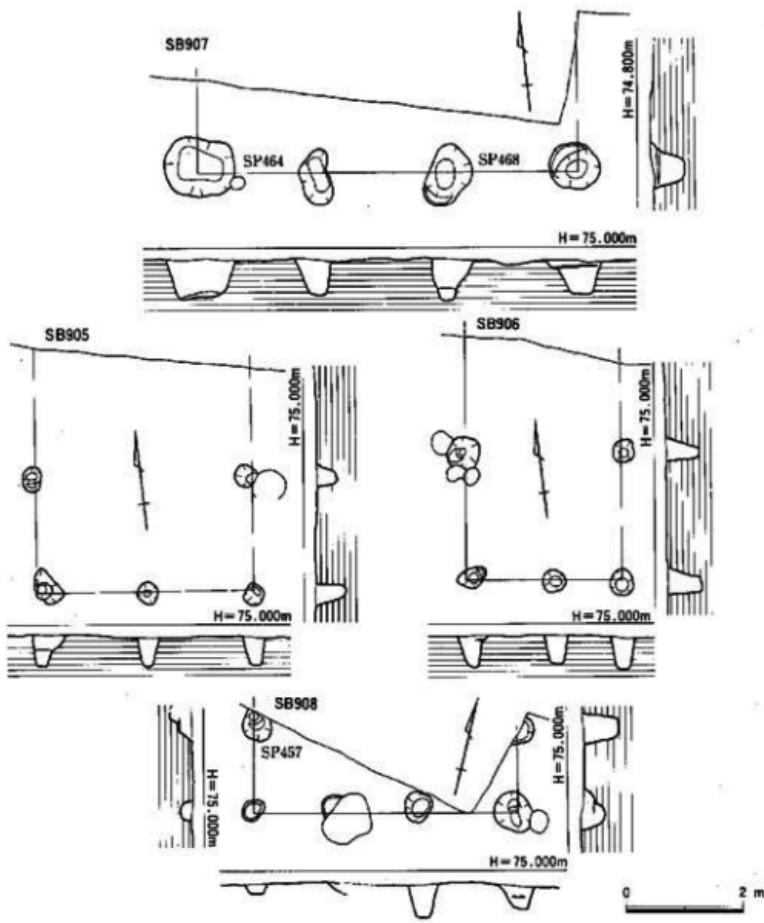
SB902(第16図) SB901の東側で検出した。主軸方位をN-4°-Eにとる2間×2間の側柱建物である。梁間は全長3.6、3.8mを測る、南側がやや短い。柱間は1.6~2.0mである。桁行は全長4.3、4.5mで、柱間は2.1~2.3mである。柱穴は略円形を呈し、径25~40cm、深さ10~40cmを測る。覆土はSB901と同様の暗茶褐色土を主体とする。遺物は北西隅の柱穴からしか出土しておらず、糸切り底土師器小皿の細片1片にとどまる。

SB903(第16図) 調査区の北端で検出した。北側が調査区外に延びており、全容は明確でないが、主軸方位をN-10°-Eにとる2間×3間以上の側柱建物と考えられる。梁間は全長5.0m、柱間は2.4、2.6mを測る。桁行の柱間は2.0mである。柱穴は円形又は楕円形で、径40~120cm、深さは梁間の中柱のみが20cm、他は40~60cmを測る。覆土はやや赤味をおびた灰褐色を呈する。

出土遺物(第19図46・47) 46は溶岩製の茶白下臼である。西側桁行のSP657・662・664各出土の3片が接合したものである。擦り合わせ部を欠失する。受け皿部の復元径は36.4cm、底部は上げ底で復元径は27.8cmを測る。47は備前焼IV期の擂鉢で、復元口径は28.0cmを測る。擦り目は8本単位である。SP664から出土した。他に糸切り底の土師器、陶器、青磁等の細片が出土している。



第16図 SB901・902・903・904実測図 (1/100)



第17図 SB905・906・907・908実測図 (1/100)

SB904(第16図) 調査区の中央北側で検出した1間×2間の小規模な側柱建物である。主軸方位はN-10°-Eにとる。梁間は全長2.1mを測る。桁行の全長は4.2mで、柱間は2.0~2.2mである。柱穴は円形を呈し、径30~55cm、深さ30~50cmを測る。覆土はSB903と同様の灰褐色土を主体とする。遺物は土師器の細片が少量である。またSP407から銅錢が出土したが銹化が著し

く、遺存状態も不良なことから銘名は不明である。

SB905(第17図) 調査区の東側北端で検出した。北側が調査区外に延びており全容は明らかにできないが、現存では主軸方位をN-6°-Eにとる2間×2間以上の偶柱建物と考えられる。梁間の全長は3.6m、柱間は1.8m、桁行の柱間は2.0mを測る。柱穴は円形又は楕円形をなし、径30~40cm、深さ35~50cmである。東側桁行の南側から2番目柱穴が東接するSB906の柱穴に切られる。覆土はSB903と同様の灰褐色土である。なお、各柱穴からの出土遺物は無い。

SB906(第17図) SB905を切り、同一の主軸方位をとる。また、覆土も類似する。2間×2間以上の偶柱建物と考えられ、北側が調査区外に位置するため規模は明確でない。梁間は全長2.7mで、柱間は1.2m、1.5mである。桁行の柱間は2.2mを測る。柱穴は円形を呈し、径40~55cm、深さ50~55cmである。土師器、土鍋、磁器の細片が少量出土した。

SB907(第17図) SB906の西1mに位置する。建物の大半が調査区外に延びている。東西の柱筋を梁方向と仮定するとSB905・906同様に主軸方位をN-6°-Eにとる。梁間の全長は6.3m、柱間は2.1mを測る。柱穴は円形もしくはやや不整な隅丸方形で、平面規模は今回確認した掘立柱建物の中でも最大である。長径90~120cm、深さは55~70cmを測る。覆土は赤味をおびた灰褐色土を主体とする。東側から2番目の柱穴はSB908の柱穴を切る。

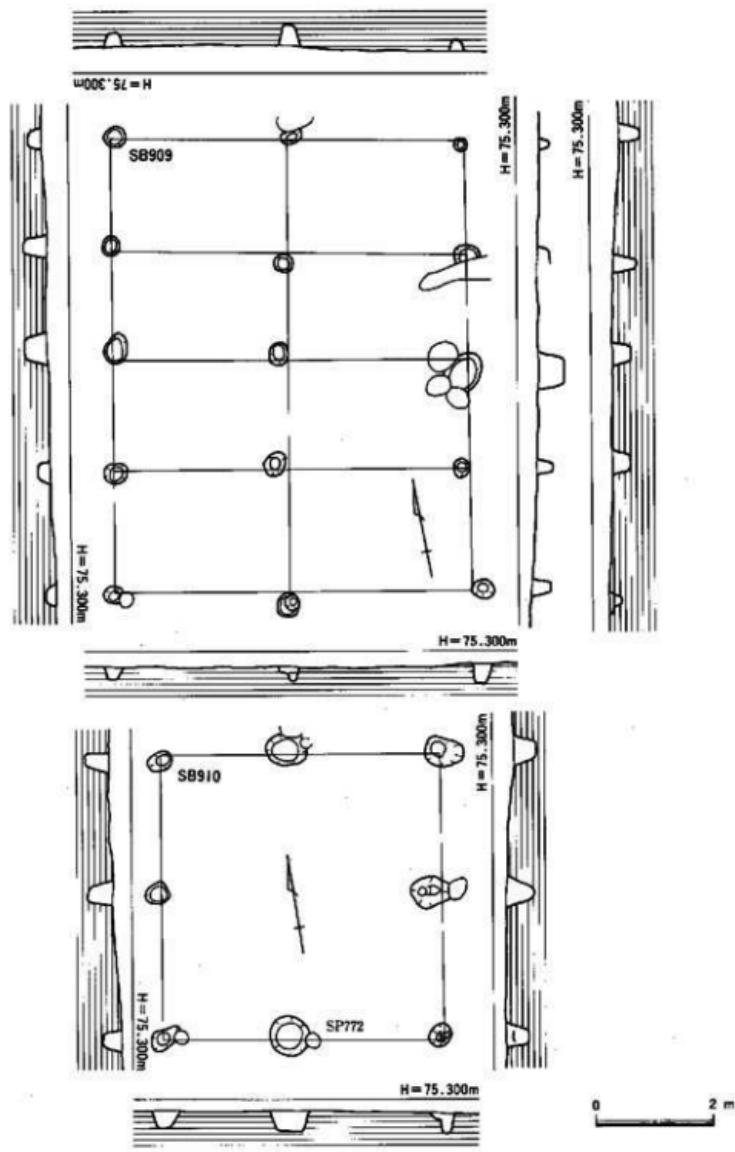
出土遺物(第19図48~50) 48・49はSP464から、50はSP468から出土した。48は瓦質の茶蓋である。肩部に綾杉状のスタンプが押される。黒灰色を呈する。49は瓦質の鉢の口縁部片である。外面は斜方向の、内面は横方向の刷毛目調整の後内外の口縁下をナデる。50は端反りの白磁皿で、復元口径10.4cm、器高3.5cmを測る。釉は乳白色で、高台内外端部及び疊付き部の釉はカキ取る。他に土師器、須恵質土器、瓦質土器、青磁等の細片が出土している。

SB908(第17図) SB907に切られる。建物は調査区の北西に延びると考えられ、3間の柱筋を梁方向とすると、主軸方位をN-15°-Wにとる。梁間の全長は4.5mで、柱間は1.5mである。柱穴はやや不整な円形で径30~60cm、深さ20~60cmを測る。覆土はSB907に類似する。

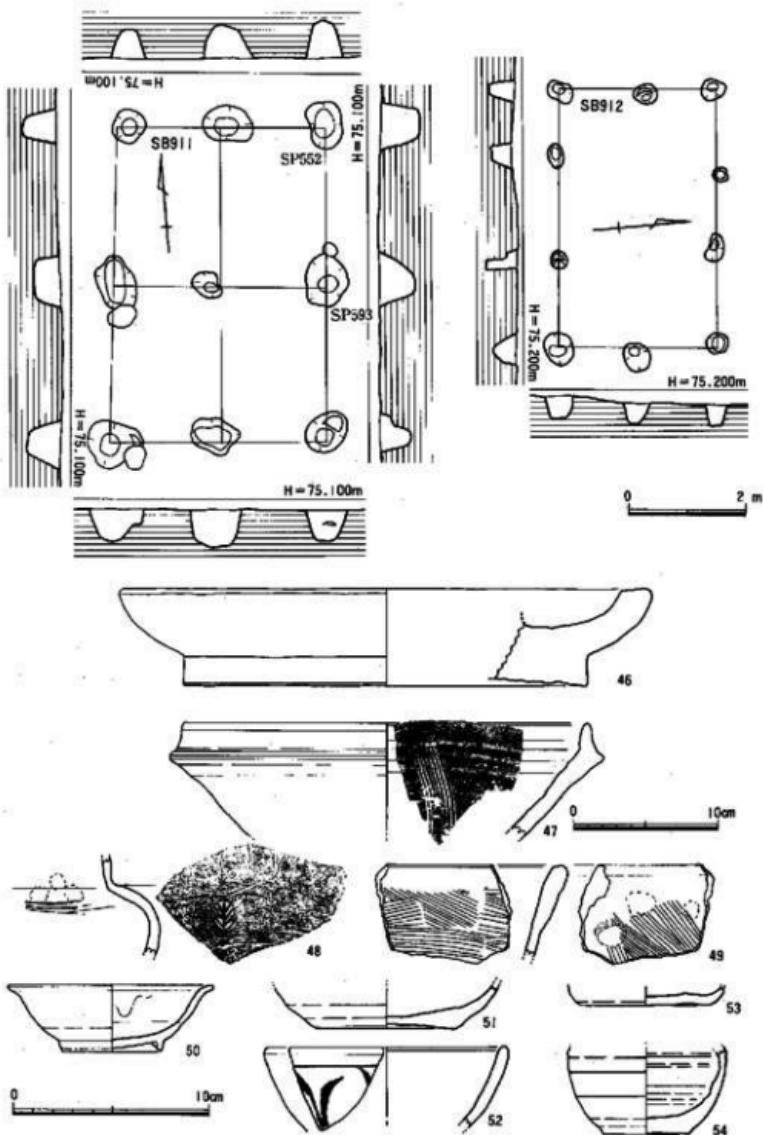
出土遺物(第19図51) 土師器壺で、復元底径7.0cmを測る。回転糸切り底で、丁寧にナデる。SP457から出土した。他に出土遺物として瓦質土器、青磁等の細片が少量ある。

SB909(第18図) 調査区の南西で検出した。2間×4間の純柱建物で、主軸方位をN-11°-Eにとる。梁間は全長6.0、6.3mと南側がやや長く、柱間は3.0、3.3mである。桁行は東西共に全長7.8mで、柱間は1.9、2.0mである。柱穴は円形を呈し、径20~65cm、深さ30~50cmを測る。東側桁行の中央の柱穴はSB910の北西隅の柱穴に切られる。覆土は赤茶褐色土を主体とする。遺物には糸切り底の土師器、青磁等の細片が少量ある。

SB910(第18図) SB909を切る2間×2間の偶柱建物で、主軸方位をN-9°-Eにとる。梁間・桁行共に全長4.8mを測る。梁間の柱間は西側が2.2m、東側が2.6mで、桁行の柱間は2.4mである。柱穴は円形又は楕円形をなし、径35~65cm、深さ30~50cmを測る。覆土は赤茶褐色



第18図 SB909・910実測図 (1/100)



第19図 SB911・912実測図 (1/100) 及びSB903・907・908・910・911出土遺物実測図
(46・47は1/4, 他は1/3)

土を主体とする。

出土遺物(第19図52) SP772から出土した龍泉窯系の青磁碗で外面に片彫りの蓮弁文が施される。復元口径は11.8cmを測る。釉は淡緑色を呈する。他に土師器の細片が少量出土した。

SB911(第19図) SB910の北東で検出した2間×2間の純柱建物で主軸方位をN-4°-Eにとる。梁間は南北共に全長3.6m、柱間1.8mで、桁行は東西共に全長5.4m、柱間2.7mである。柱穴は不整な楕円形を呈し比較的の規模が大きい。長径50~90cm、深さ45~65cmを測る。覆土はやや赤味をおびた灰褐色土をなす。

出土遺物(第19図53-54) 53はSP552から出土した回転糸切り底の土師器小皿で、復元底径6.8cmを測る。内外面共に磨滅が著しい。54はSP593から出土した備前焼の瓶で底径5.0cmを測る。外面はヨコナデ調整、底部は回転糸切り後ナデる。他に出土遺物には土師器、瓦質土器の細片がある。

SB912(第19図) 調査区の南東で検出した主軸方位をN-83°-Wにとる2間×3間の側柱建物である。梁間は東西共に全長2.7m、柱間は1.2~1.5mと不揃いである。桁行は南北共に全長4.5m、柱間は1.2~1.8mである。柱穴は円形又は楕円形を呈し、径20~55cm、深さ25~50cmを測る。覆土は赤茶褐色土を主体とする。遺物には土師器等の細片が少量ある。

(2) 土坑

本調査区においてはC-1区で報告した大型の竪穴状の土坑は確認されず、小規模な七坑が主体として検出された。SK766を除いて遺物の出土量は少ない。

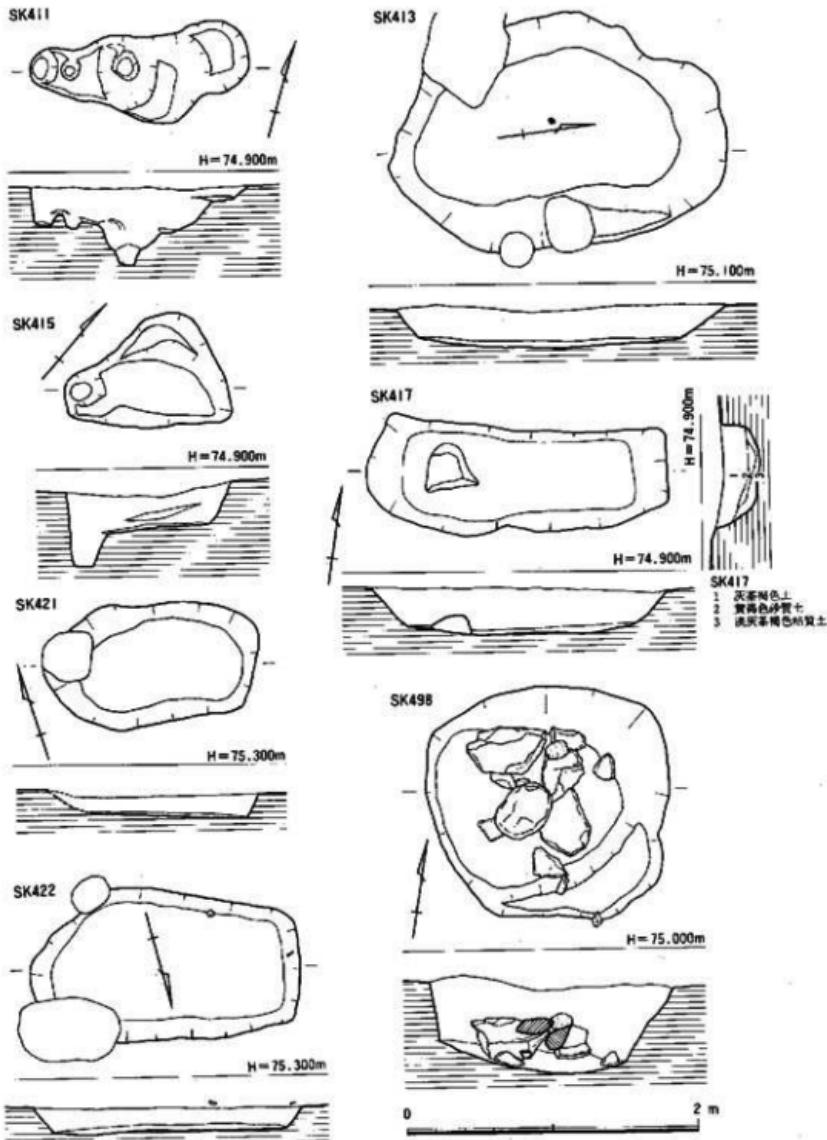
SK411(第20図) SB902の南側梁間の中柱を切る。幅0.6mを測り、中央部に深さ0.55mの掘り込みを有する。その中程で漆器を確認したが、木質は遺存しておらず、暗い赤漆に橙色の梅花文を配した被膜の一部が出土した。他に土師器の細片が少量出土している。なお、西側の2個のピットは切り合いの可能性が高い。

SK413(第20図) SB911の南側梁間の中柱に切られる。不正な楕円形を呈し、長径2.2m、短径1.6m、深さ0.25mを測る。床面は平坦である。覆土中には床面より浮いた状態で拳大から人頭大の礫が數個見られ、炭化物が含まれる。出土遺物には土師器等の細片がある。

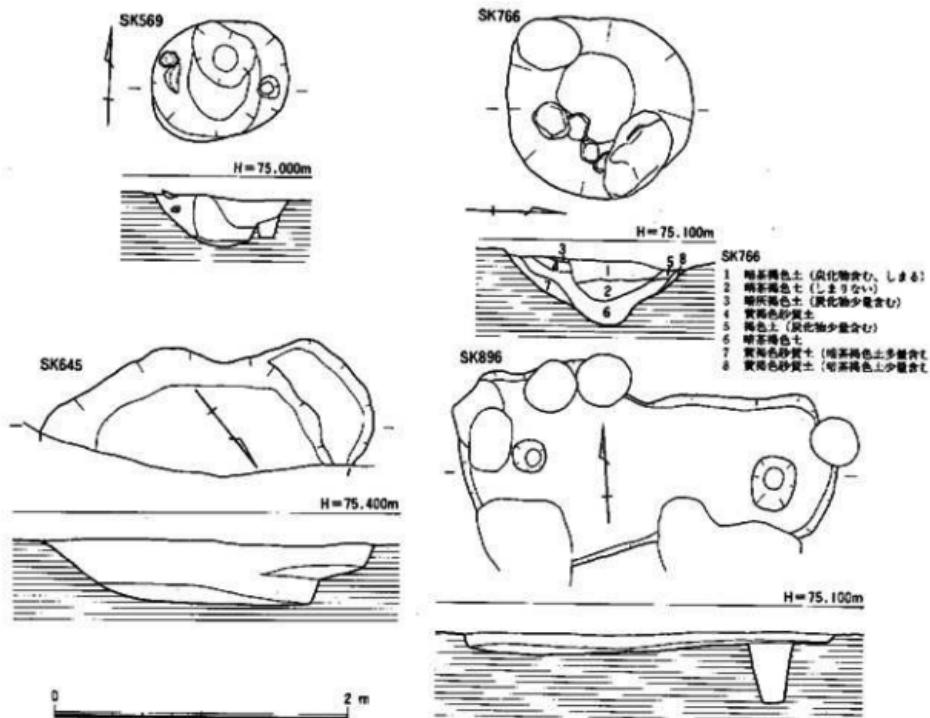
SK415(第20図) SK411の東1.5mに位置する。不整形で、北西に張り出し平坦面を有する。長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.2mを測り、南西の壁面にはピット状の掘り込みが認められた。覆土は赤茶褐色を主体とする。土師器の細片が少量出土している。

SK417(第20図) 調査区の中央部に位置するやや不整な長方形の土坑である。長さ2.1m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。床面西側には人頭大の礫が見られた。出土遺物は土師器、瓦質土器の細片が少量である。

SK421(第20図) 調査区の南に位置し、不整な楕円形を呈する。長径1.5m、短径0.8m、深さ0.15mを測る。床面は東側に緩く傾斜する。覆土は暗赤茶褐色で、出土遺物は無い。



第20図 SK411・413・415・417・421・422・498実測図 (1/40)

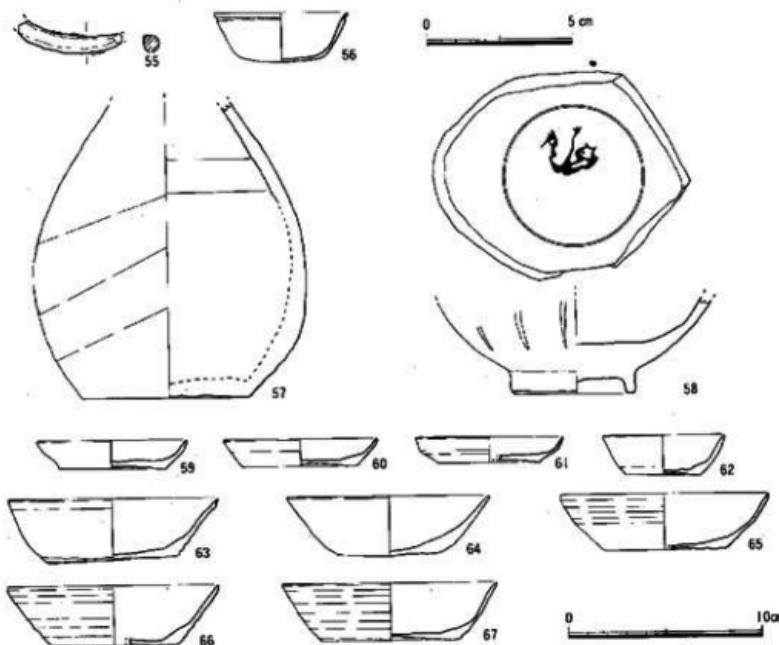


第21図 SK569・645・766・896実測図 (1/40)

SK422(第20図) SK421の北1mに位置する。不整な隅丸長方形をなし、長さ1.85m、幅1.0m、深さ0.15mを測る。床面は略平坦である。覆土は暗黄灰褐色砂質土でしまりがあり、炭化物を少量含む。

出土遺物(第22図55・56) 55は鉄釘で両端部を欠失する。56は銅製品で六器の一種と思われる。復元口径4.6cm、器高1.7cmを測り、器壁は薄い。口縁下に1条の沈線を巡らせる。共に上面付近で出土した。他には糸切り底の土師器の細片数点と錫化の著しい鐵製品の小片が出土している。

SK498(第20図) 調査区の東端に位置し、SD497を切る。不整な円形を呈し、径1.6~1.8m、深さ0.6mを測る。南東側に平坦面を有する。床面はレンズ状をなし、東側に傾斜する。覆土中には巨礫が含まれるが、人為的な配置は看取されない。土色は暗灰褐色で黄褐色のブロックを



第22図 SK422・498・569・766実測図 (55・56は1/2、他は1/3)

含む。

出土遺物(第22図57) 備前焼の徳利形瓶である。底径9.5cmを測る。体部外面は斜方向の粗削りを施し、底部は粗くナデる。やや上げ底である。頸部に刻字風のヘラがきが見られるが、上部を欠失している。他に土師器等の細片が少量出土している。

SK569(第21図) 調査区の東に位置する。半円形を呈し、径0.9m、深さ0.3mを測る。断面は半椭円形をなす。

出土遺物(第22図58) 龍泉窯系の青磁碗で、上面付近で出土した。底径6.1cmを測る。外面には片影りの蓮弁文を有する。内面見込み部には沈線を施し、スタンプ文を有する。疊付きまで施釉され、一部高台内面に及ぶ。釉色は淡緑色を呈する。他に糸切り底の土師器小皿等の細片が少量出土している。

SK645(第21図) 調査区の南端に位置し、SD419に切られる。深さ0.4mを測り、東側に平坦面を有する。覆土には多量の礫を含む。出土遺物には土師器、瓦質土器、白磁の細片が少量ある。

SK766(第21図) 調査区の中央南側に位置する。略円形を呈し、径1.25m、深さ0.45mを測る。断面は深いレンズ状を呈する。

出土遺物(第22図59~67) 59~62は土師器小皿である。59~61は小皿aで順に口径は7.5、7.7、7.4cm、器高は1.5、1.4、1.3cmを測る。いずれも回転糸切り底で板状圧痕は認められない。内外面共にヨコナデを施し、丁寧に仕上げる。淡黄褐色を呈し、精良な胎土に金雲母片を含む。59・60は完形品である。62は小皿bで、復元口径6.1cm、器高2.1cmを測る。回転糸切り底で板状圧痕は無い。調整、色調、胎土ともに小皿aに類似する。63~67は土師器壺である。順に口径は10.6、10.2、10.7、10.7、11.0cm、器高は3.3、3.1、2.9、3.1、3.0cmを測る。いずれも回転糸切り底で板状圧痕は無い。64を除いて、体部外面に細かい凹凸が認められ、胎土が小皿aに類似する。他に土師器、磁器の細片が出土している。遺物は覆土中位から主として出土した。

SK896(第21図) 調査区の中央東側に位置し、SB911の柱穴に切られる。多数のピットと重複するが、不整な隅丸長方形を呈し、長さ2.5m、幅1.35m、深さ0.1mを測る。床面は西側に緩く傾斜し、両端にピット状の掘り込みが認められた。なお、出土遺物は無い。

(3) 溝

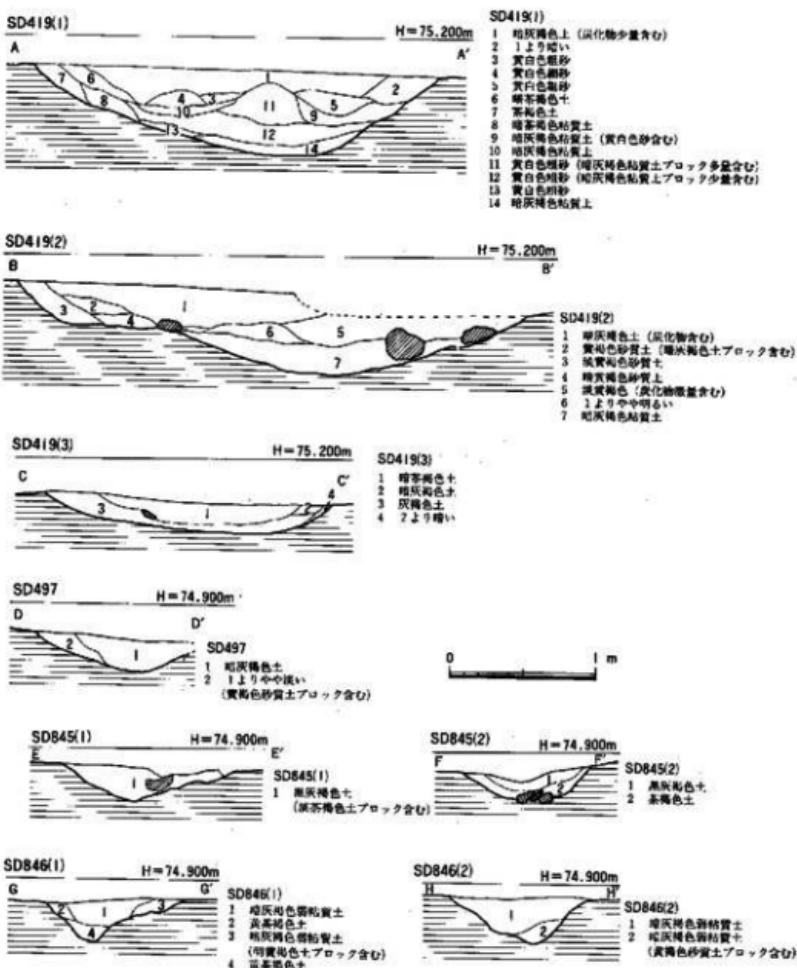
SD419(第23図) 調査区の南東で検出したが一部調査区外に延長する。幅は0.8~3.0m、深さは最も浅い北端部では0.1m、西端部では0.15mで、四部を呈するT字状に交差する箇所に傾斜し、最深部で0.6mを測る。主として覆土の下層部には粘質土、その上位には砂質土が見られることから、一定期の帯水後、流水があったと考えられる。

出土遺物(第24図68~72) 68は瓦質の火舎で口縁下に2条の突帯を貼り付け、その間にスタンプによる梅花文を有する。外面はナデ、内面は横方向の刷毛目を施す。69は瓦質の鍋で外面は指揮毛後に刷毛目、ナデ調整が行われる。煤が付着する。内面は粗い横方向の刷毛目で口縁部直下はナデ消す。70は土師質小皿で、復元口径7.8cm、器高1.4cmを測る。回転糸切り底で、板状圧痕は認められない。71は李朝青磁の皿で、底径は4.4cmを測る。灰緑色の釉を全面に薄く施釉する。内底部及び豊付き部には重ね焼きの目痕が残る。72は土師質の羽釜である。鋤下には煤が付着する。内外面ともにナデを施すが、横方向の刷毛目が部分的に残る。他にも土師器、瓦質土器等の細片が出土している。

SD497(第23図) 調査区の東端に位置し、SK498に切られる。大半が調査区外に延び、北西側の肩しか検出し得なかった。深さは0.2mを測る。出土遺物には土師器、瓦質土器の細片が少量ある。

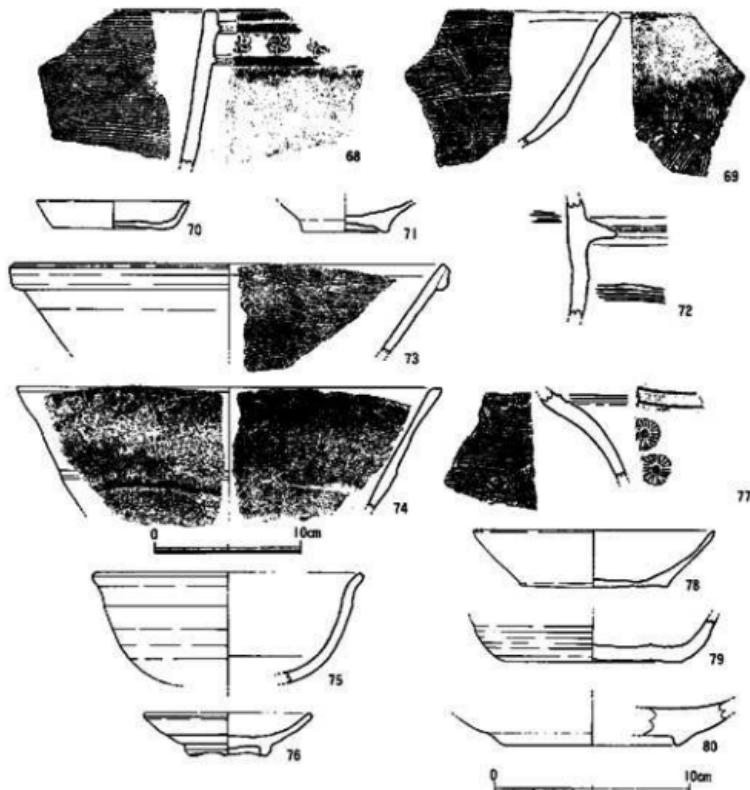
SD845(第23図) 調査区の北西端に位置し、SD846に並行する南北方向の溝で全体に削平が著しく遺存状況は悪い。SD846と北端部で切り合うか前後関係は不明確であった。南端部は削平により、消失する。幅0.8~1.4m、深さ0.1~0.3mで北側に緩く傾斜する。

出土遺物(第24図73~78) 73・74は土師質の鍋である。73は復元口径29.0cmを測り、口縁下



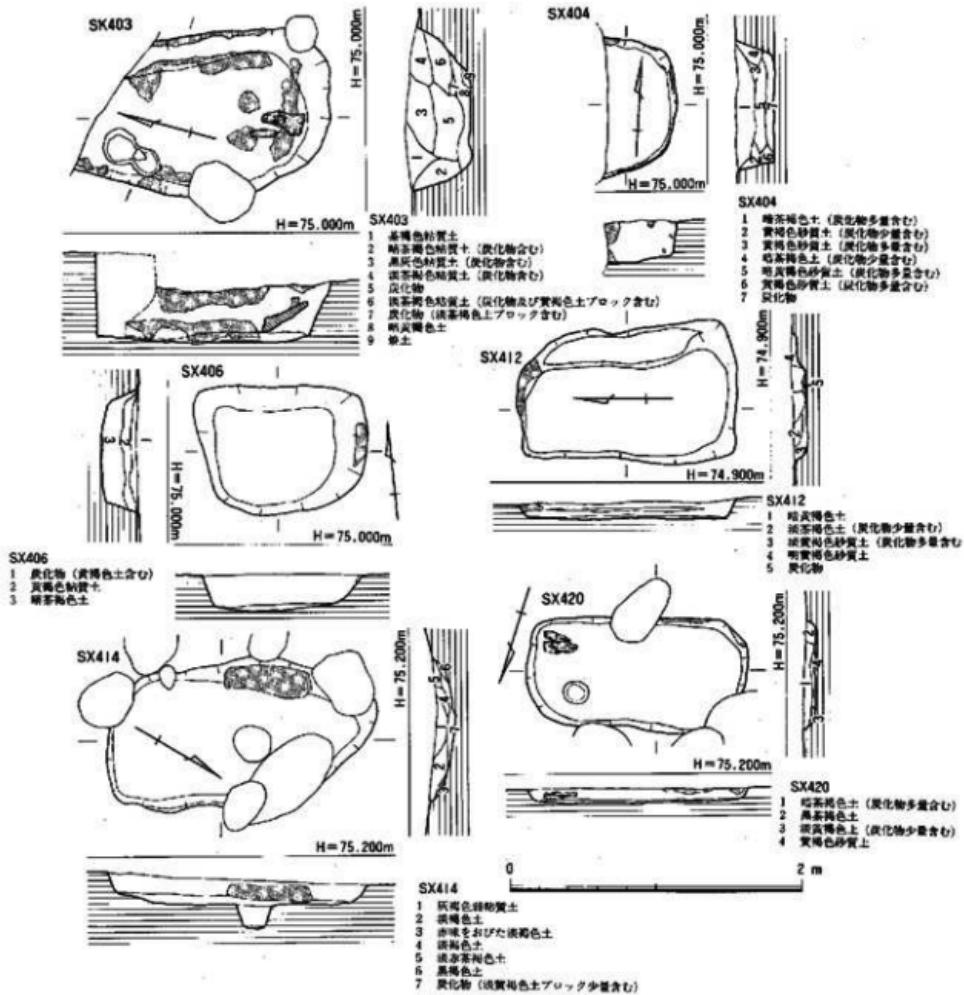
第23図 SD419・497・845・846土層断面実測図 (1/40)

に玉縁状の突帯を貼り付ける。外面は指頭圧後ナデ、内面は横方向の刷毛目を施す。74は復元口径29.0cmを測る。口縁部を僅かに外反させ、体部に突帯状の段を有する。外面は指頭圧後刷毛目で、口縁下はナデ消す。内面は横方向の刷毛目である。口縁部上端にはナデにより僅かに



第24図 SD419・845・846出土遺物実測図 (68・69・73・74は1/4、他は1/3)

凹む。外面には煤の付着が見られ、器面が一部剥落する。75は青磁碗で復元口径13.8cmを測る。内湾気味の体部に外反する口縁部を有する。釉は空色がかった明緑灰色を呈す。76は白磁の皿で低い高台を有する。明灰白色の釉が内面及び体部中位までかけられ、一部高台際に垂れる。高台には4ヶ所断面浅皿状の割りが施される。内底部には目跡が残る。77は瓦質の茶釜で肩部に2条の細い突帯を有し、その下にスタンプによる菊花文が施される。外面はナデ、内面は横方向の刷毛目である。78は土師器坏で、復元口径12.2cm、器高3.0cmを測る。回転糸切り底で、板状圧痕は無い。他にも土師器、瓦質土器、白磁、青磁が出土しているが、細片が多い。



第25図 SX403・404・406・412・414・420実測図 (1/40)

SD846(第23図) SD845と同様に削平により造存状況は悪い。調査区の北端で東側にL字状に折れる。幅は0.5~1.0m、深さは0.3mを測る。

出土遺物(第24図79-80) 79は土師器壺で復元底径9.4cmを測る。回転糸切り底で、板状圧痕

は認められない。80は青磁碗で復元底径8.4cmを測る。低い高台に厚い底部を有する。くすんだ緑色の釉が高台内部まで厚く施される。遺物は土師器、瓦質土器、陶器の細片がある。

(4) 焼土坑

SX403(第25図) 調査区の北東端に位置し、北側は調査区外に延びる。隅丸の長方形を呈し、幅1.1m、深さ0.4mを測る。東西壁面及び床面の一部が焼け、覆土中にも焼土が存在した。土師器の細片が出土した。

SX404(第25図) 調査区の東端に位置し、西側を擾乱により切られる。隅丸長方形をなし、現存で幅0.95m、深さ0.3mを測る。壁面が部分的に焼ける。下層には炭化物層が認められた。土師器の細片が数点出土した。

SX406(第25図) 調査区の北端に位置する。やや不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.25mを測る。東側壁面の一部が焼ける。出土遺物は無い。

SX412(第25図) 調査区の北東に位置する。隅丸の長方形を呈し、東側に平坦面を有する。長さ1.5m、幅0.95m、深さ0.1mを測る。北東隅の壁面が焼ける。土師器、青磁の細片が僅かに出土した。

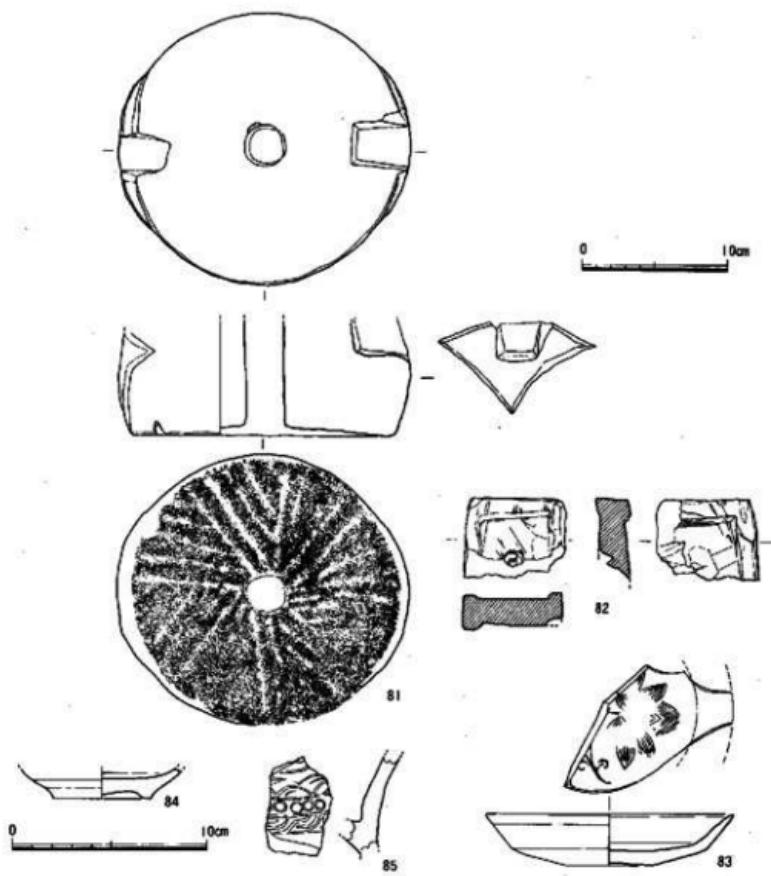
SX414(第25図) 調査区の南東に位置し、SB912の柱穴に切られる。不整な隅丸長方形をなし、長さ1.8m、幅0.95m、深さ0.2mを測る。長軸の両壁面が焼け、床面の中央部にピット状の掘り込みが認められた。出土遺物には土師器、青磁の細片がある。

SX420(第25図) SX414の西3mに位置する。隅丸長方形を呈し、長さ1.5m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。南西の壁面が焼け、南島床面には木炭が遺存していた。出土遺物は無い。

(5) その他の遺構と遺物(第26図81~83)

ピット出土上の遺物及び遺構検出時に採集した遺物のうち、主だったものについて報告する。

81は調査区の略中央に位置する径30cm程のSP410から出土した砂岩製の茶臼上臼である。上半部を欠失する。擦り合わせ面の径18.0cm、芯棒孔径2.7cmを測る。下面是使用のため磨滅が著しい。擦り目は幅2~3mmで、分割主溝8本、副溝4本と思われる。側面は丁寧に研磨し、深さ3.8cmの挽木装着の方形の孔を対に穿っている。孔の周辺には菱形状の浮き彫りを施す。82は調査区に西端に位置するSP843から出土した下半部を欠失する滑石製の硯である。幅5.1cmを測る。両面に方形の海部を有し、片面の海部中央に径9mmの円錐形の孔が穿たれる。全面にノミによる削痕が認められる。83はSB909の西に位置するSP854から出土した青磁皿である。復元口径12.8cm、器高2.7cmを測る。体部中位で屈曲し、直に延びる口縁部を有する。屈曲部の内面には沈線を入れる。内底見込み部は細線による草花文様が施される。外底部は釉をカキ取って露胎となる。釉は淡オリーブ色である。84・85は遺構検出時に採集した李朝の磁器である。84は青磁の皿で、復元底径は5.0cmを測る。灰緑色の釉を全面に施す。疊付き部には目跡が残る。85は象嵌青磁瓶の底部片である。雷文、円文、波文の白象嵌を施す。



第26図 C-2区ピット及び遺構検出面出土遺物実測図 (81は1/4他は1/3)

V. 栗尾B遺跡第1次調査の記録

1. 概要

本調査区は脊振山より北西に延びる丘陵端部に位置し、栗尾B遺跡の北端に該当する。北東側を栗尾川が流れ、調査区の北約30mで西流する小笠木川と合流する。道路建設及び田面の削りに伴い3,845m²を調査した。耕作土、床土下の安定した黄褐色粘質土が遺構面となり、北西に向かって傾斜する。遺構面の標高は南側で80.3m、北側で76.7mを測る。調査区の北側の田面とは現況で2m知覚の比高差があり、栗尾川に向かって急激に落ちる。なお、田面造成時の削平が遺構面におよび、調査区には丘陵斜面に沿う様に段落ちが数段に亘って認められる。検出した遺構は土坑、焼土坑、溝、ピットである。また、縄文時代の包含層を確認し、グリッド調査を行った。遺構番号は調査時に001から通し番号を付し、以下の報告にあたっても同一の番号に遺構略号を付して記述している。

2. 遺構と遺物

1) 土坑

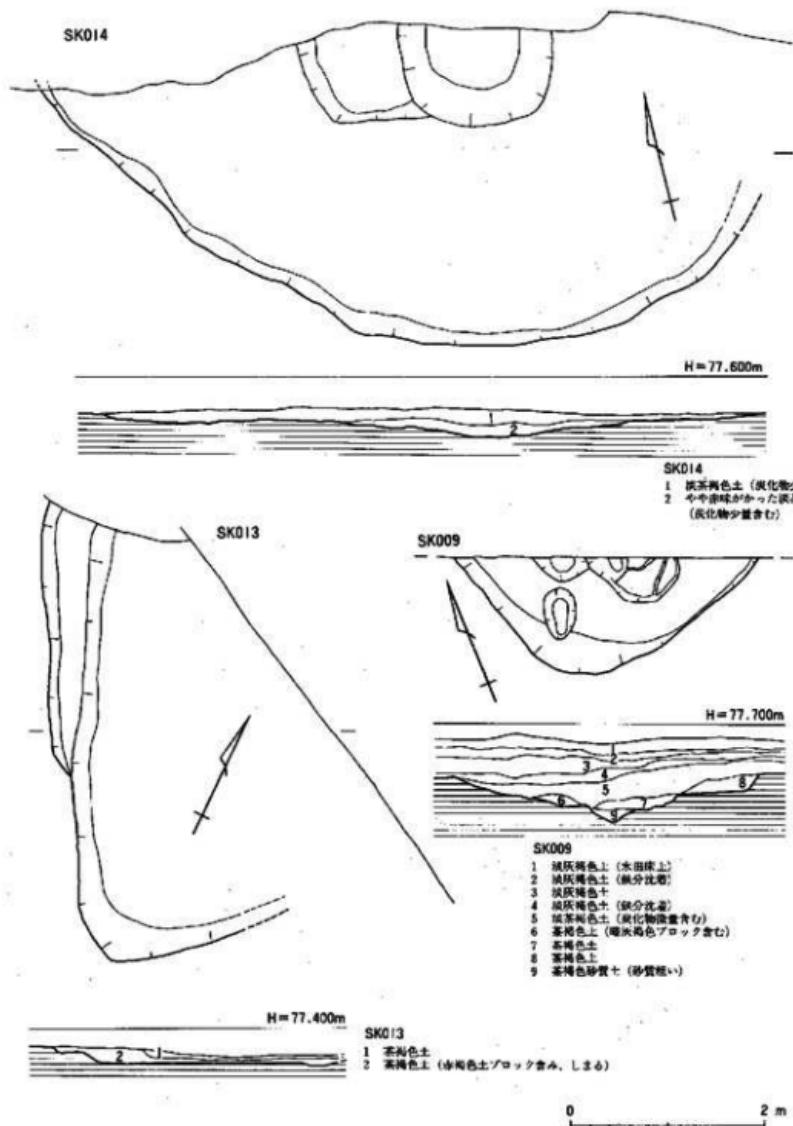
調査区の北端で検出したSK009・013・014は覆土に遺物を含み、平面でのプランは確認できるが、いずれも壁面の立ち上がりが不明瞭で人為的な掘り込みとは断定し難い。丘陵端部の凹部に遺物が含まれたものと推定されるが、ここでは土坑に含めて報告する。

SK009(第27図) 調査区の北端に位置し、SK013・014を切る。隅丸の方形を呈すると推定されるが、北側が調査区外に延びるため全容は不明である。断面は皿状で、壁面の立ち上がりは緩やかである。床面には楕円形及び不整形な凹みを有する。出土遺物には土師器、陶器等に細片が少量ある。

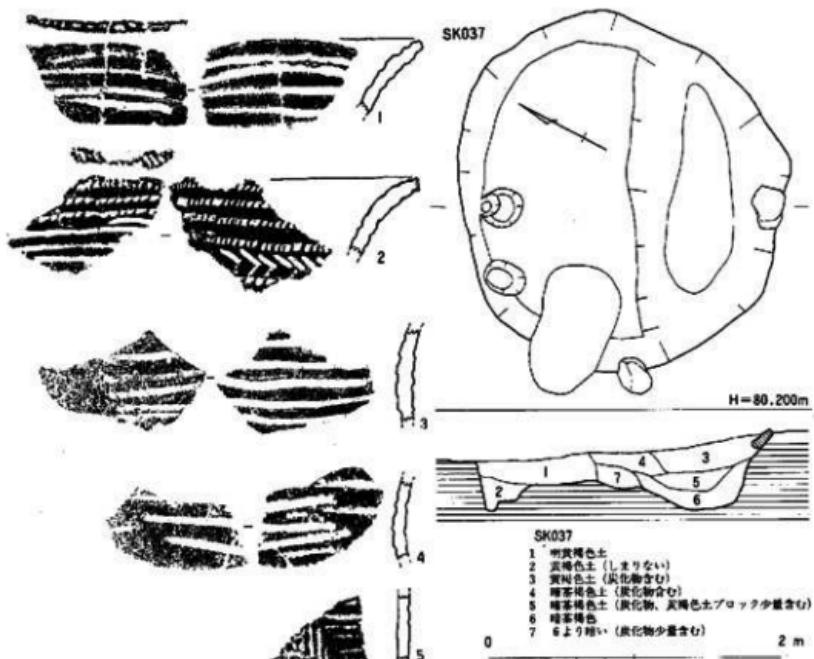
SK013(第27図) SK009に切られる。検出当初の不整形なプランを数cm掘り下げた時点で東側は消失したが、南側に隅丸のコーナーを有する比較的明瞭なプランを確認したため、土層ベルトを残し、掘り下げを行なった。壁面の立ち上がりは緩やかである。深さは10cm程度で、床面は略平坦である。ピット等の掘り込みは認められなかった。出土遺物には回転糸切り底の土師器小皿等の細片が少量ある。

SK014(第27図) SK009に西接し、SK009及びSD012に切られる。円形を呈するが、西側では壁面の立ち上がりが極めて緩い。断面は浅皿状を呈する。床面には楕円形もしくは隅丸方形の凹みが認められた。

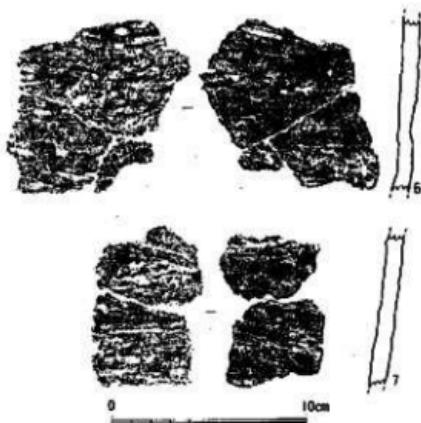
出土遺物(第28図1~5) 遺物は60数点が出土し、縄文土器、中世の土師器・擂鉢・白磁等及び鉄滓が1点確認された。いずれも細片で、この内縄文土器と考えられるものが13点で、図化し得る遺物は以下の5点である。1~5は曾畠式土器である。1は外反する口縁部の内外面に短沈線文を施し、口唇部には刺突文を有する。内外面は丁寧にナデる。色調は暗茶褐色を呈



第27図 SK009・013・014実測図 (1/60)



第29図 SK037実測図 (1/40)



第28図 SK014・037出土遺物実測図 (1/3)

する。2は外反する口縁部の外面には押引き文が施され、その下位に短沈線文を巡らせる。内面には上位から順に斜方向からの刺突文、羽状文、押引き文が施文され、口唇部には刺突文を施す。外面は黄褐色で、内面は暗茶褐色を呈する。3・4は外外面に短沈線文を施文する。3は外面は暗茶褐色を呈し、磨滅する。内面はにぶい黄褐色で、丁寧にナデる。4は外外面共に磨滅する。淡黄褐色の外面には黒斑が認められ、

内面は赤褐色を呈する。5は赤褐色を呈する外面に四角文が施文される。内面は無文で黒褐色である。内外面ともに磨滅する。1~5の胎土には角閃石、石英を含むが、滑石の混入は認められない。

SK037(第29図) 調査区の南側に位置する径2.1mの円形土坑である。床面には凹凸が見られ、南側には掘り込みを有する。覆土の上位に少量の焼土が認められた。

出土遺物(第28図6・7) 6・7共に縄文土器の粗製深鉢で、内外面には削りを施し、内面には粗いナデを加える。胎土には砂粒を多量に含み、色調は淡黄褐色を呈する。他にも粗製の縄文土器と思われる細片が少量出土した。

2) 溝

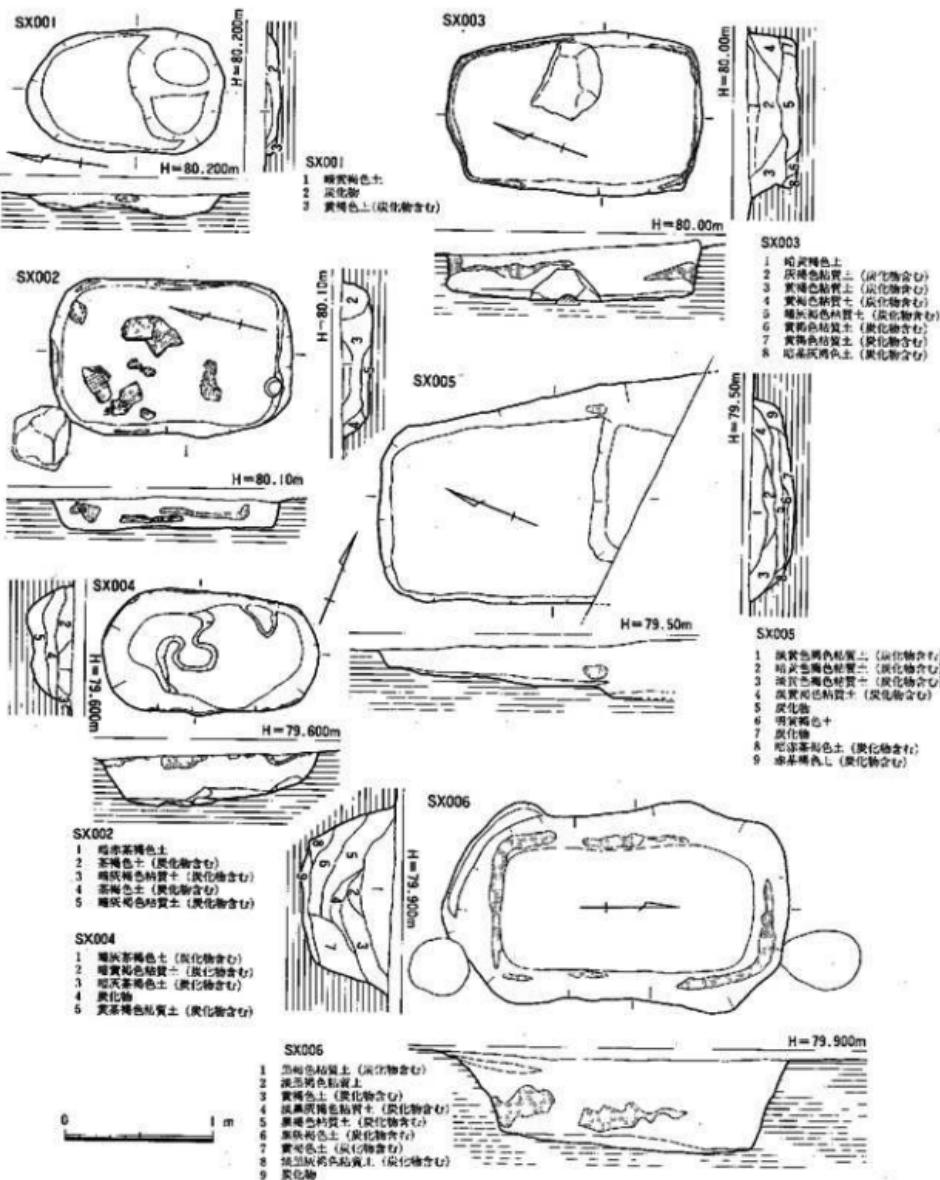
SD012(第30図) 調査区の南端に位置し、SK014を切る。南側の肩部 第30図 SD012上断面実測図(1/40)を確認し、深さは0.8mを割る。
及び出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第30図8) 回転糸切り底の土師器小皿で、口径7.2cm、器高1.2cmを測る。板状压痕は認められない。体部内外面はヨコナデ、内底部にはナデが施される。覆土の上位で出土した。他に土師器、陶磁器等の細片が少量出土している。

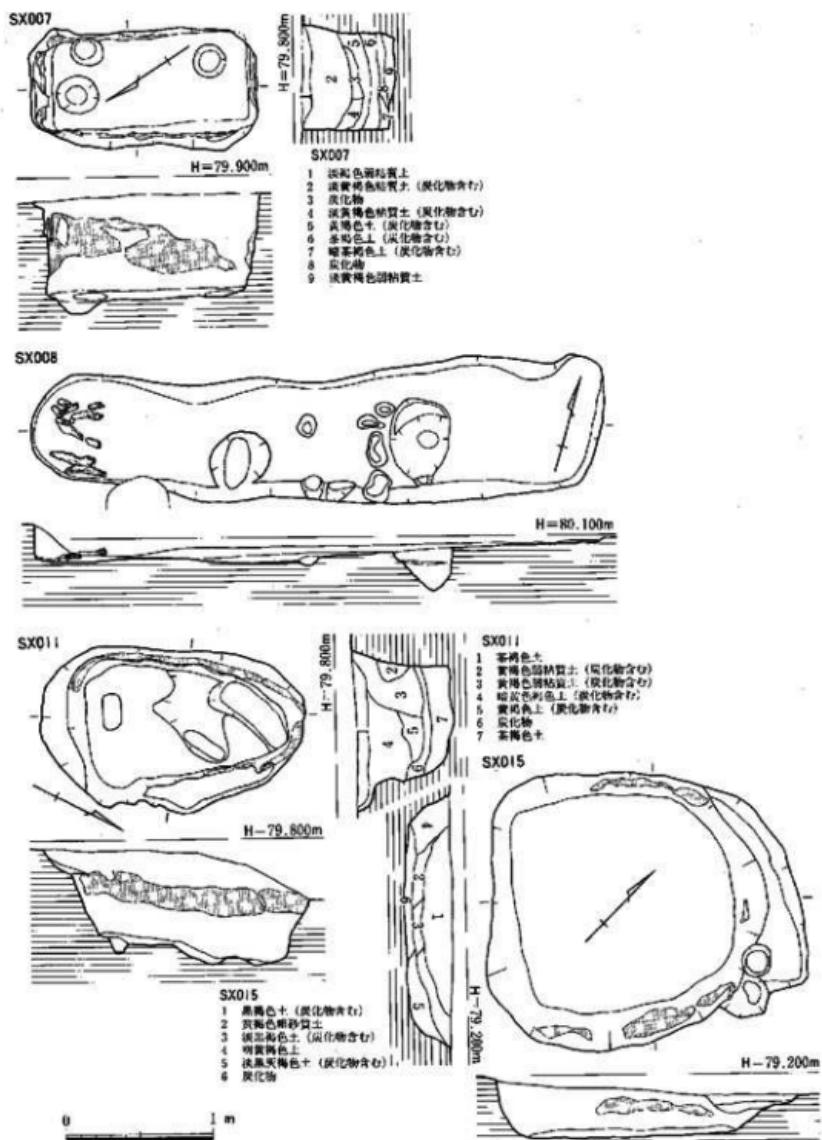
造構番号	持団番号	平面形	断面形	長さ×幅×深さ(m)	焼土		本炭
					壁面	床面	
SX001	第31回	不整隅丸長方形	浅皿形	1.3×0.9×0.2	○	×	×
SX002	第31回	隅丸長方形	逆梯形	1.6×1.1×0.2	○	×	○
SX003	第31回	隅丸長方形	逆梯形	1.8×1.1×0.4	○	×	×
SX004	第31回	隅丸長方形	逆梯形	1.5×0.8×0.3	○	×	×
SX005	第31回	隅丸長方形	逆梯形	2.2×1.4×0.4	○	×	×
SX006	第31回	不整隅丸長方形	逆梯形	2.4×1.4×0.6	○	×	×
SX007	第32回	長方形	長方形	1.5×0.8×0.7	○	×	×
SX008	第32回	不整隅丸長方形	浅皿形	3.9×1.0×0.2	×	×	○
SX011	第32回	不整隅丸長方形	逆梯形	1.8×1.1×0.8	○	×	×
SX015	第32回	不整方形	逆梯形	2.1×1.9×0.4	○	×	×
SX016	第33回	不整方形	逆梯形	1.7×1.5×0.3	○	×	×
SX017	第33回	隅丸長方形	逆梯形	1.5×1.1×0.3	○	×	○
SX018	第33回	不整隅丸長方形	逆梯形	1.4×1.0×0.2	○	×	×
SX019	第33回	不整隅丸長方形	逆梯形	2.4×1.6×0.8	○	×	×
SX020	第33回	不整隅丸長方形	逆梯形	2.3×1.9×0.6	○	×	×
SX021	第34回	不整隅丸長方形	逆梯形	2.0×1.4×0.3	○	×	○
SX022	第34回	隅丸長方形	逆梯形	1.8×1.1×0.7	○	×	×
SX023	第34回	不整隅円形	浅皿形	1.6×1.1×0.1	×	○	○
SX024	第34回	隅丸長方形	逆梯形	1.5×0.9×0.3	○	×	○
SX025	第34回	隅丸長方形	逆梯形	2.0×1.1×0.5	○	×	○
SX027	第34回	隅丸長方形	逆梯形	1.7×0.9×0.5	○	×	×
SX028	第35回	隅丸方形	逆梯形	1.8×1.7×0.3	○	×	×
SX029	第35回	隅丸長方形	逆梯形	1.5×0.9×0.3	○	×	×
SX030	第35回	隅丸長方形	逆梯形	1.5×0.8×0.5	○	○	○
SX031	第35回	隅丸長方形	浅皿形	1.5×0.8×0.0	○	○	○
SX032	第35回	不整隅丸長方形	逆梯形	1.4×0.9×0.2	○	×	×
SX033	第35回	不整隅丸長方形	逆梯形	1.9×1.3×0.6	○	×	×
SX034	第35回	不整隅丸方形	逆梯形	1.2×1.0×0.1	○	×	×
SX035	第36回	不整隅丸方形	逆梯形	1.7×1.2×0.4	○	○	×
SX036	第36回	隅丸長方形	逆梯形	1.4×0.9×0.5	○	×	×

第3表 栗尾B遺跡第1次調査焼土坑一覧表

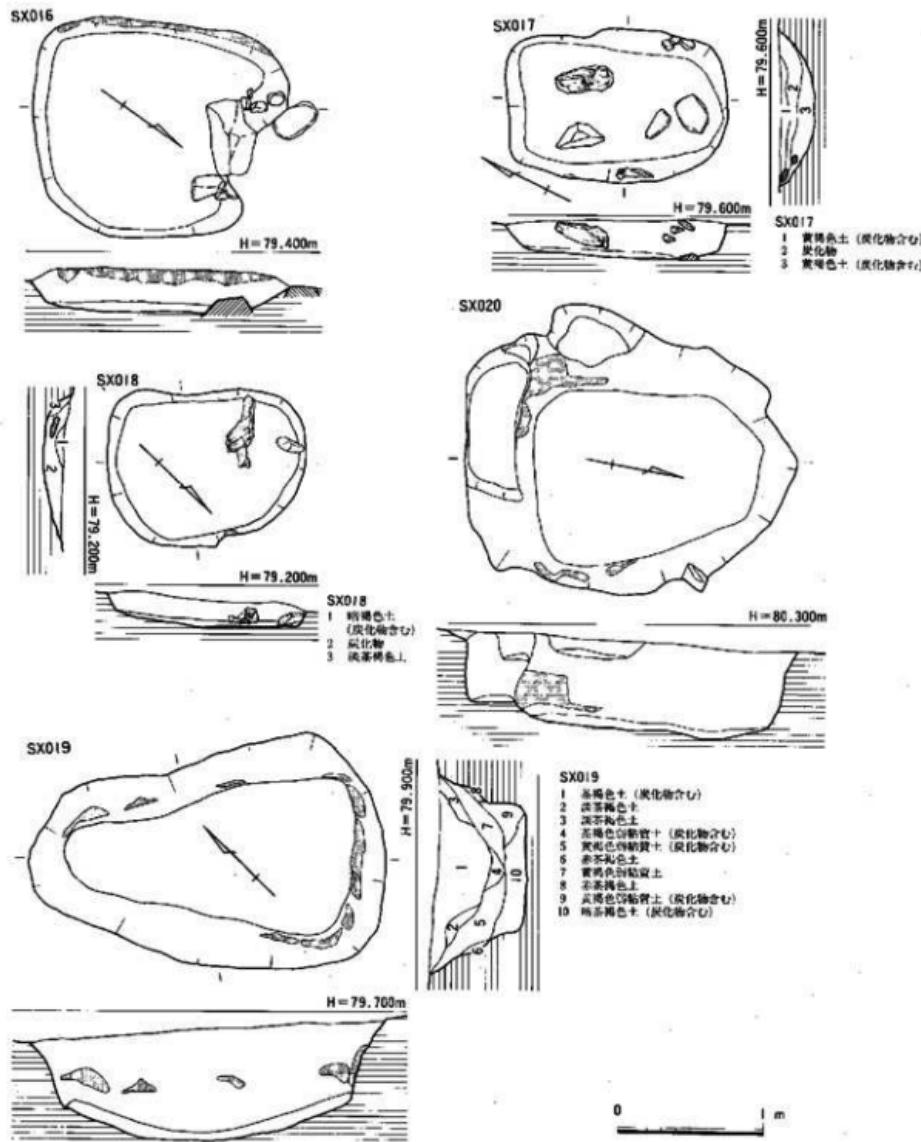




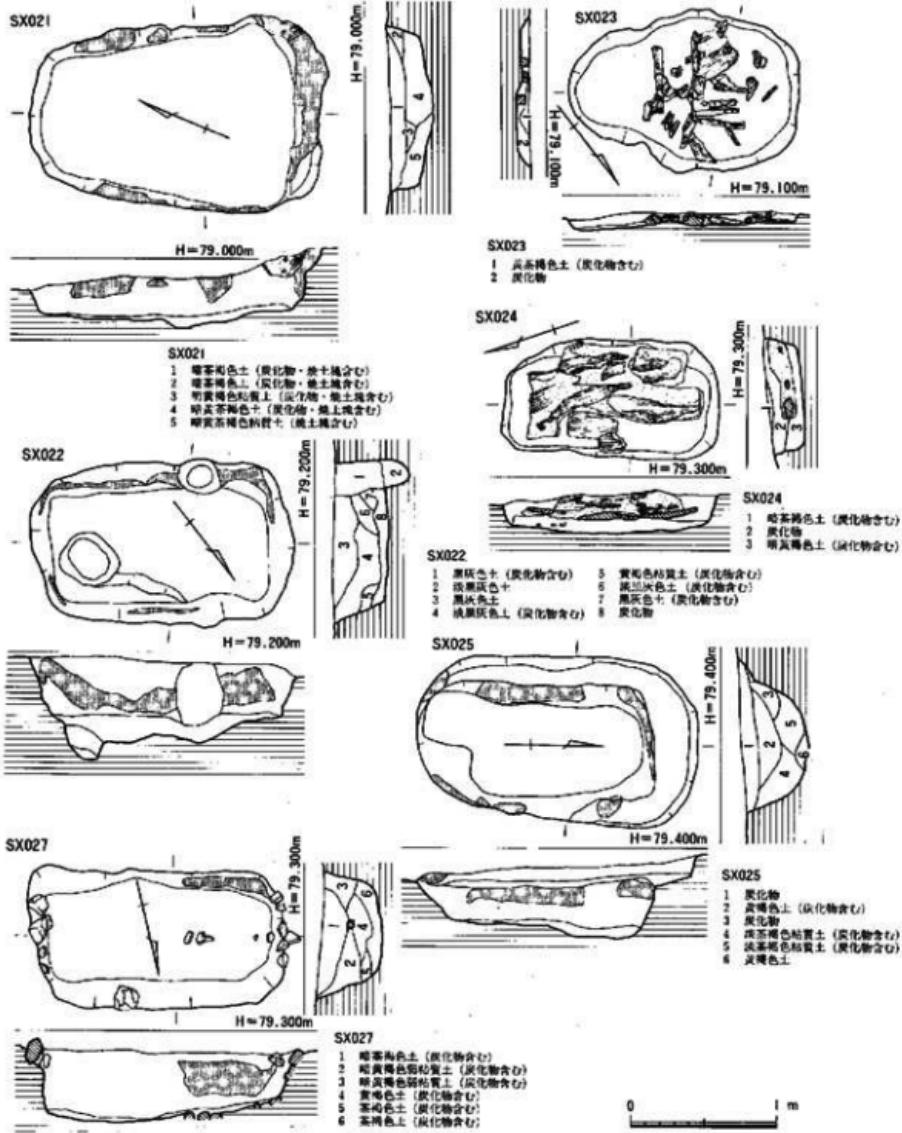
第31图 SX001~006实测图 (1/40)



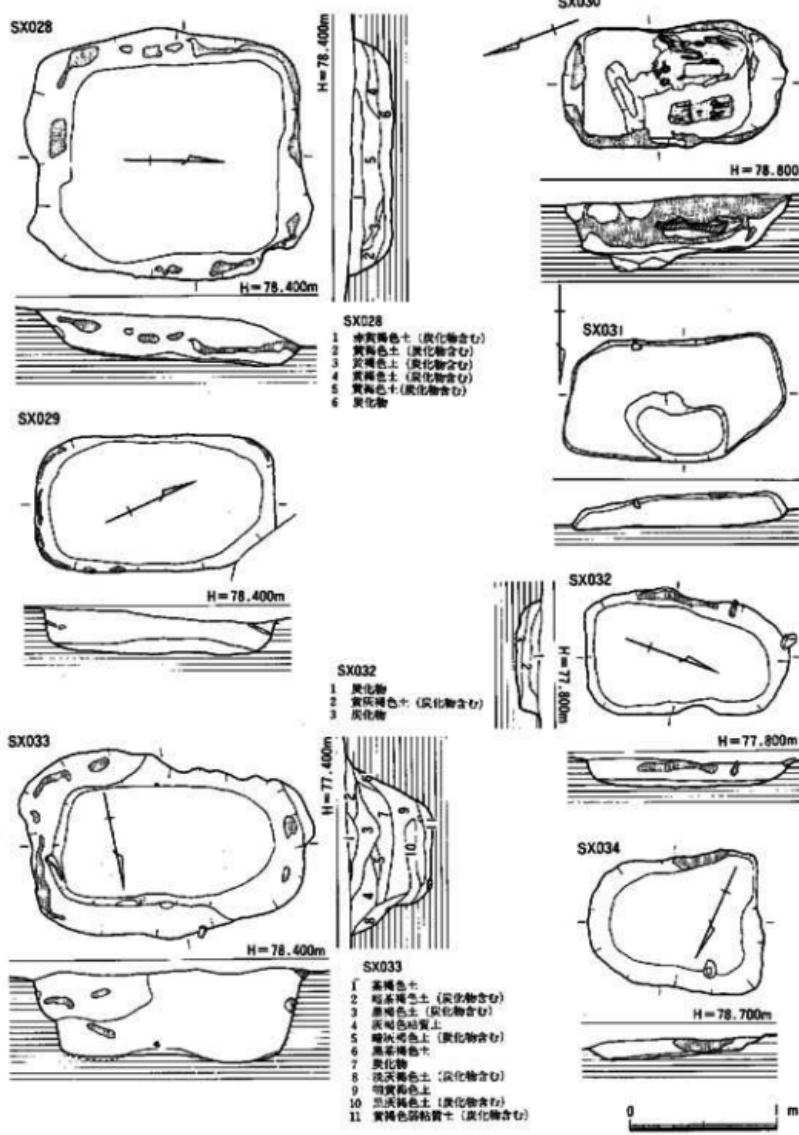
第32図 SX007・008・011・015実測図 (1/40)



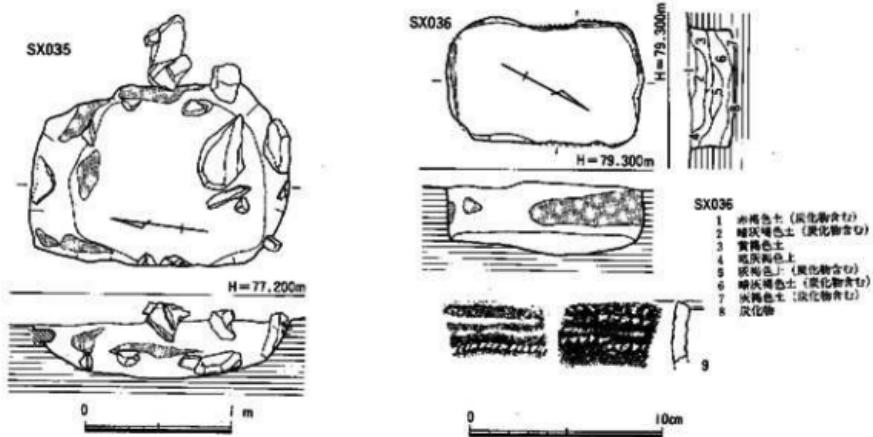
第33回 SX016～020実測図 (1/40)



第34図 SX021～025・027実測図 (1/40)



第35図 SX028~034実測図 (1/40)



第36図 SX035・036実測図 (1/40) 及びSX033出土遺物実測図 (1/3)

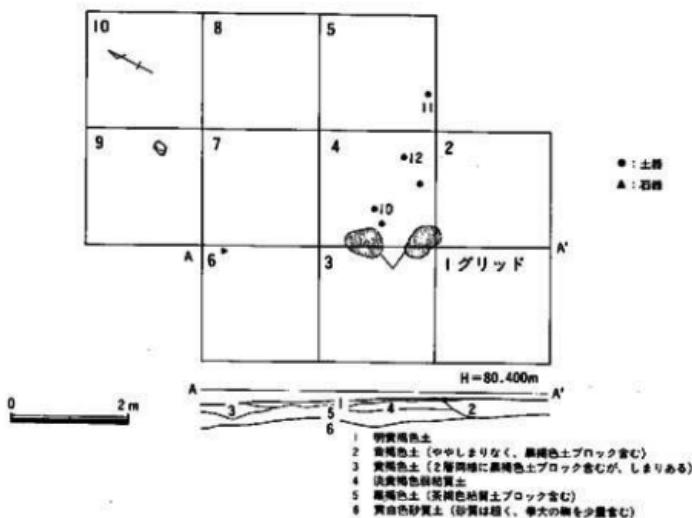
3) 烧土坑(第2表、第31図~36図)

調査区の全域で30基を確認した。南西部にやや集中するが顕著なものではない。平面プランは隅丸方形を呈するものが大半であるが、SX008は狭長なプランを有する。脇山A遺跡第3・4・5次及び本書報告の同第7次A区、同遺跡の南に位置する谷口遺跡に類例が認められるが、希少である。ただ、いずれの例も深さが10~20cmと浅く、一般的な焼土坑とは機能を異にする可能性がある。なお、各遺構の詳細は表及び插図に依られたい。

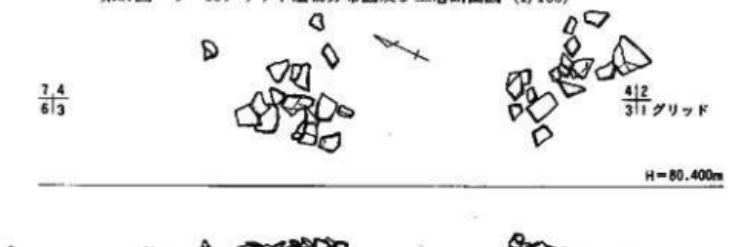
出土遺物(第36図9) SX033から出土した縄文土器片である。緩く外反する口縁部の内外面に
矧沈線文、押引き文を施文する。暗茶褐色を呈し、胎土には角閃石、石英を含む。施文法、色
調、胎土が近接するSK014出土遺物に類似する。他の数基の焼土坑からも遺物が出土している
が、いずれも少量の磨滅した細片である。

4) 包含層(第37・38図、付図2)

調査区南側の遺構検出時に押型文土器が遺構面である黄褐色土中に含まれていることを確認したため、その周間に2m四方のグリッド(1~10グリッド)を設定し、掘り下げを行なった。3・4グリッドの境界部分に比較的まとまった土器群を検出した他は各グリッドの遺物は少量であった。なお、6グリッドでは両面に粗い剥離を加えた石器が1点出土した。主に遺物が包含されるのは遺構面である(明)黄褐色土の下層に一部見られる淡黄褐色の弱粘質土の上位である。この層は3・4グリッドの周囲に僅かに見られるもので、面的な広がりをもたない。また、包含層の範囲を確認する目的で、調査区中央及び北側に同様のグリッド(11~18グリッド)を



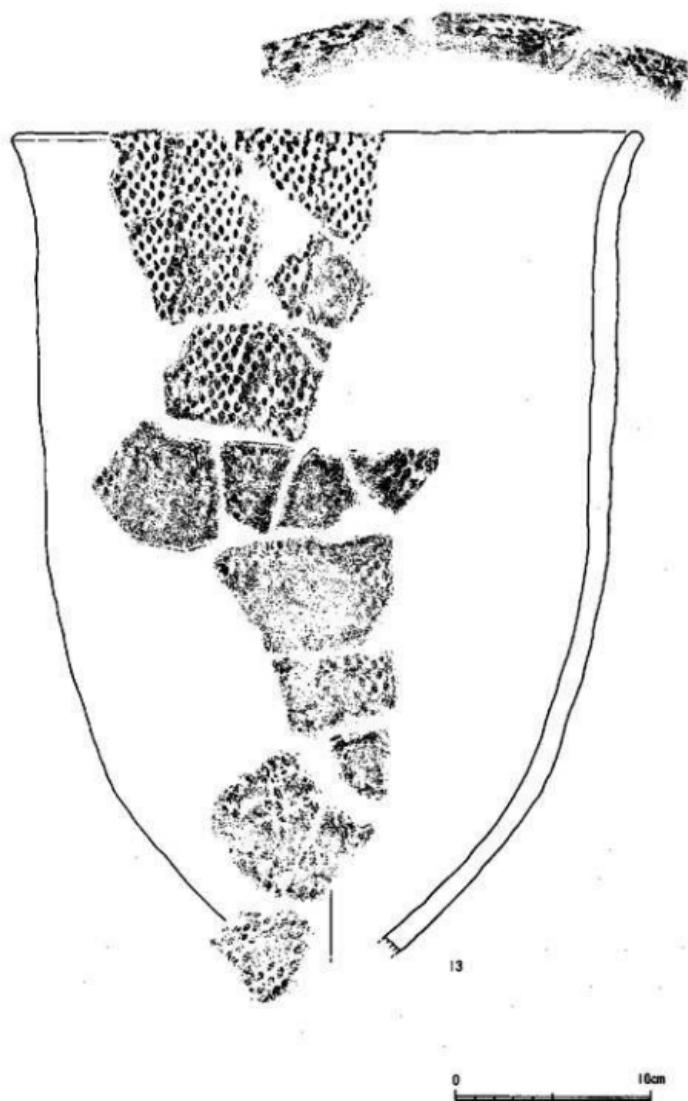
第37図 1~10グリッド遺物分布図及び土層断面図 (1/100)



第38図 3・4グリッド遺物出土状況実測図 (1/20)



第39図 包含層出土遺物 I (1/3)



第40図 包含層出上遺物II (1/3)

設定したが、15・16グリッドで各1点磨滅した縄文土器の細片を確認した程度である。

出土遺物（第39図10～12、第40図13）

13は3・4グリッドの境界部分（第37図網かけ部、第38図）で出土した土器片を復元した押型文土器である。計35点の破片が約50cmの間隔をおき、2群に分かれ確認された。3点を除いて外面を表にした状態で出土した。接合関係は良好で、外面の接合部は磨滅により補修を行なったが、内面では32点の破片に接合面を有し、底部を欠失するものの略全容を知り得た。残りの3点も同一個体と思われるが、直接の接合面をもたず、また施文の磨滅により部位が明確ではない。復元口径31.8cm、残存器高40.9cmを測る大型の深鉢で、長刷の体部に緩く外反す口縁部を有する。胎土には砂粒を含み、色調は外面の上半部がにぶい黄褐色、下半部及び内面がにぶい黄橙色を呈する。器壁の厚さは0.9～1.3cmで、口縁部及び体部中位がやや薄いものの、略一定の厚さである。焼成は良好である。外面全面に横円文を縱走施文する。ただし、体部の下半は磨滅により不明瞭となる。内面には同一と思われる原体により口縁部から幅1.7cmの横走施文が施され、下端には原体端部の軌跡が一部認められる。施文が鮮明な外面上半の部分的な観察から原体の復元を試みると、文様の反復が2単位ごとに認められ、その長さは2.0cm前後であることから、原体の直径は0.64cm前後を測ると推定される。施文の重複部間の幅は6条、4.0cm前後である。よって、この上器に用いられた原体は直径0.64cm、長さ4.0cm以上、6条以上、2単位の横刻（一部斜刻）のものと考えられる。また、施文の前後関係は上下では確認し得なかつたが、縱方向の施文重複部の関係では右側が後の施文となる。

10は2グリッドから出土した押型文土器で、上下は不明である。色調は外面が黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈し、器壁の厚さは1.2cmを測る。外面には横円文が縱走施文され、文様の反復は2単位ごと、2.0cm前後の幅を有する。施文の重複が縱方向に観察されるが、前後関係は不明瞭である。内面にはナデが施される。なお、13と比較すると外面の色調がやや異なるものの、施文反復単位や焼成、胎土が類似しており、直接の接合部は認められないが、同一個体と思われる。

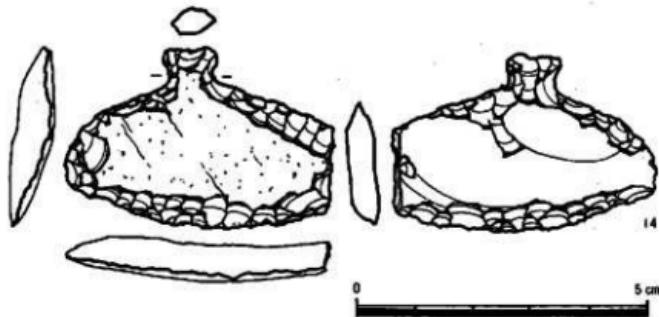
11は5グリッドから出土した押型文土器で、上下は不明である。色調は内外面ともににぶい黄橙色で、器壁の厚さは1.3cm前後である。外面には横円文が縱走施文され、10同様に文様の反復が2単位、2.0cmごとに認められる。上位に横方向の施文重複部と思われる箇所が見られるが前後関係は不明である。内面にはナデが施され、この破片も13と同一個体の可能性が高い。10・11は胴部片と考えられる。

12は4グリッドから出土した押型文土器の細片で、10・11同様に上下は不明である。色調は外面が淡黄橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。細片のため不明確ではあるが、文様反復は上述の破片同様に2単位、2.0cmごとに認められる。内面にはナデを施す。ただ、10・11に比して円弧が小さく底部付近の破片と思われる。これらの押型文土器は下菅生B式に対比できよう。

他にも4グリッドから2点の土器片が出土した。1点には楕円押型文が施されるが、器壁の大半が剥落し、詳細は不明である。他の1点は細片で、磨滅が著しい。

5) その他の遺物（第41図14）

14は調査区南側での遺構検出時に採集した安山岩製の横形石匙で、原礎面を残す。摘み部は両側からの剥離により抉りを作り出し、逆梯形を呈する。ローリングが著しい。



第41図 遺構検出面出土遺物 (1/1)

VI. 結語

今回報告した脇山A遺跡、栗尾B遺跡の調査では縄文時代と中世の遺構・遺物を中心に確認した。ここでは脇山A遺跡で検出した中世集落の時期的位置付け及び周辺集落との関連を含め、若干の考察を行いたい。

まず、集落範囲を明確にするためC-1・C-2区の周辺の試掘成果を補足するとC-2区の東側には旧河川が検出され、南北では遺構密度は極めて薄い。またC-1区の西接する箇所では第6次調査（5地点）が実施されており、集落の広がりは看取されない。よって、両区の調査ではひとまとめの集落を略明らかにし得たといえる。全体に遺物の出土量は少ないが、大まかな時期区分を行うと、C-1区では12世紀の後半から13世紀代の遺構が中心をなし、C-2区では14世紀から16世紀にかけての遺構が認められる。時期の細分化は遺物が少量で困難であるが、C-2区で抽出した12棟の建物についての時期的変遷に触れると、柱穴覆土は茶褐色系（SB901・902・909・910・912）と灰褐色系（その他のSB）の2区分が可能で、これは据立柱建物としてまとめきれなかった他のピットにも共通している。調査区の南西では前者が主体をなし、後者は調査区の北東に分布する。同色の重複は多いが、前者が後者を切ることは殆ど認められず、この差異は時期差を反映しているものと想定される。前者に属するSB910からは14世紀代の龍泉窯系の青磁碗が出土している。後者はSB903の備前IV期後半の擂鉢やSB907の端反り白磁皿から15世紀後半から16世紀にかかる時期が推定され、同様の覆土を呈するSD419の遺物も該期に該当する。前者の時期比定には疑問も残るが、C-1区→C-2区南西部→C-2区北西部という大枠での集落変遷が認められる。

当属状地の中世集落は広範囲の調査に拘りてもわずか数箇所に限定される。既往の調査成果から抜粋すると、脇山A遺跡第4次調査における扇央部から端部におよぶ地区、その南側の同第5次調査C-F地点、脇山A遺跡南側の扇頂部に位置する野中遺跡（以上12世紀後半から13世紀）、北東端部の同第6次調査4地点（15世紀代）、今回報告したC-1・2区である。時期的には12世紀から16世紀にわたるが、平面的分布からは1時期の集落の占有域は比較的小規模である。遺構密度に着目すると中世前半の該地における水田開発に伴い散在する小集落が形成され、中世後半から末には4地点、C-2区の集落に集村化した可能性を示唆的ながら示しておく。また、幸いに該地では文献史料による集落組織変遷を軸にした脊振山所領支配構造の変化が吉良国光氏によって論及され¹⁾、15世紀代前後の小領主層の出現による在地構造の変化という画期が指摘されている。遺構・遺物の検討が不十分なまま、上述した見解と早計に対照させることはここではできないが、興味深い指摘であり、今後の課題として再考したい。

註

1) 吉良国光「脊振山の所領支配と村落—筑前国早良郡脇山を中心として—」『九州史学特集号』1987

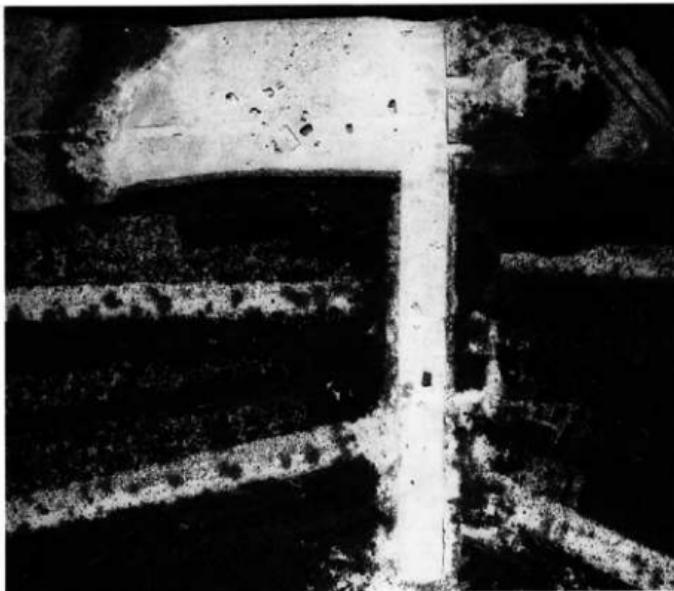
図 版



発掘調査参加者



(1) A区全景（上空から）



(2) B区全景（上空から）

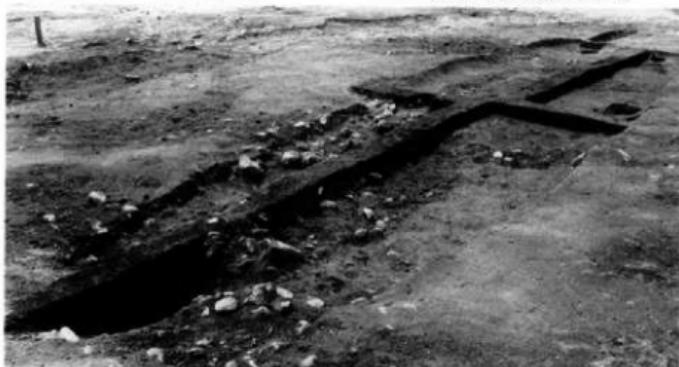
脇山A遺跡



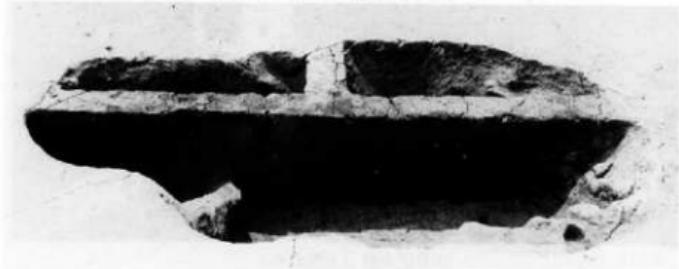
(1)A区S X301（北から）



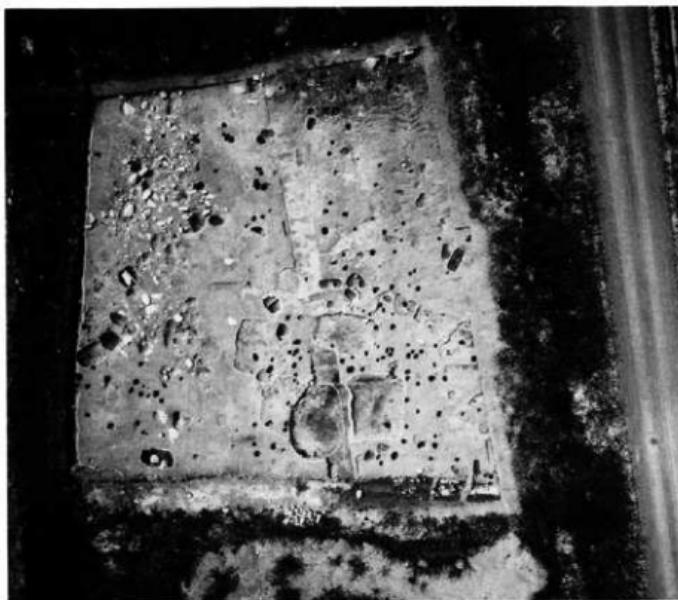
(2)B区S X208（北から）



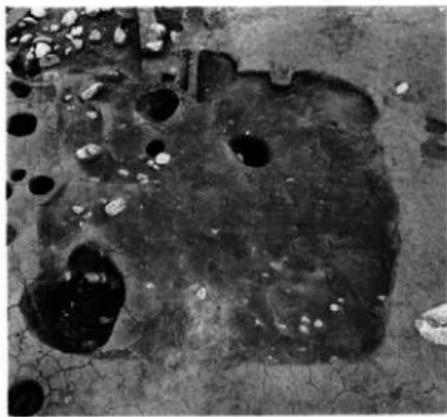
(3)A区S X303土層（南から）



(4)B区S X212土層（東から）



(1) C-1 区全景 (上空から)



(2) C-1 区 S K004 (南から)



(3) C-1 区 S K005 (西から)

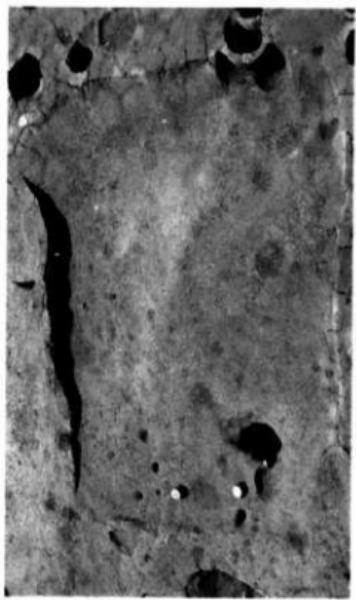
脇山 A 遺跡



(2) C - 1 区 S K009 (東かたち)



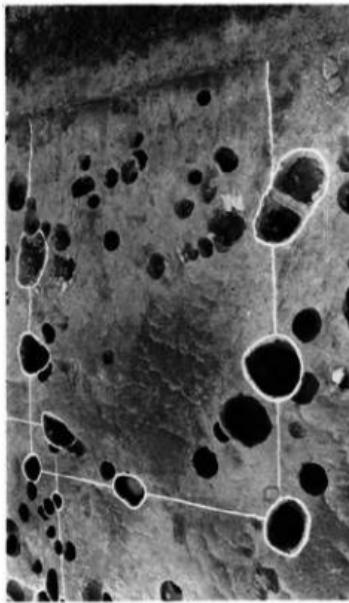
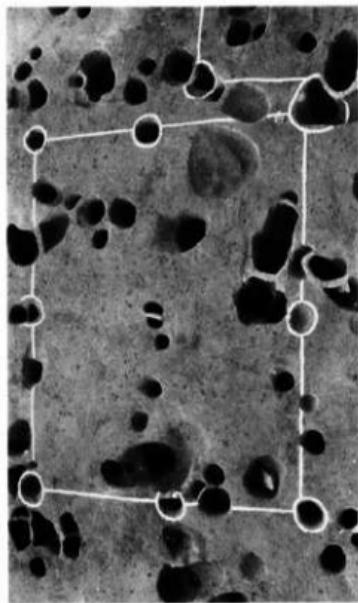
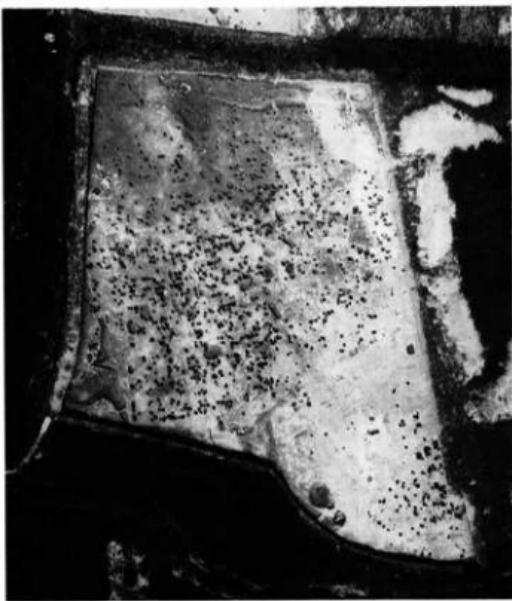
(4) C - 1 区 S X003 (南かたち)



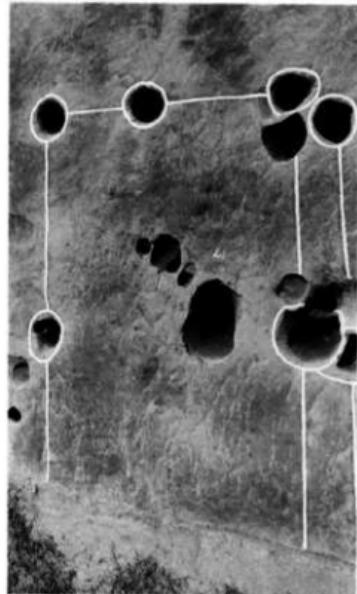
(1) C - 1 区 S K007 (西かたち)



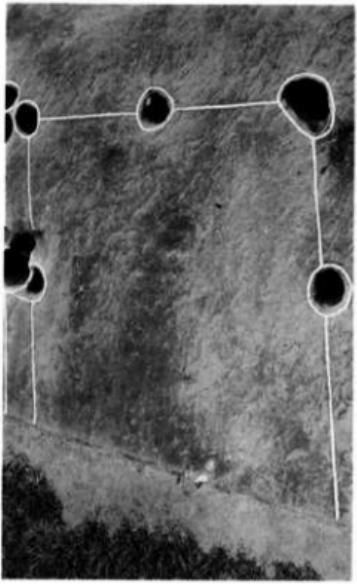
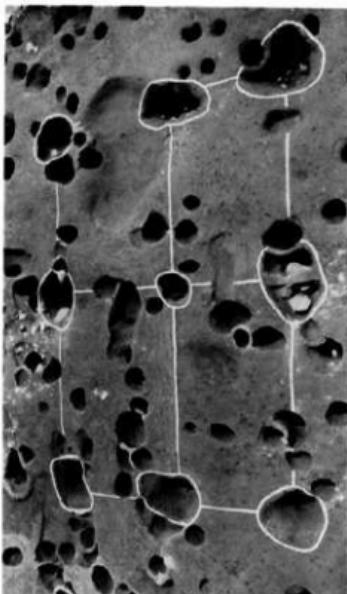
(3) C - 1 区 S X002 (北西かたち)



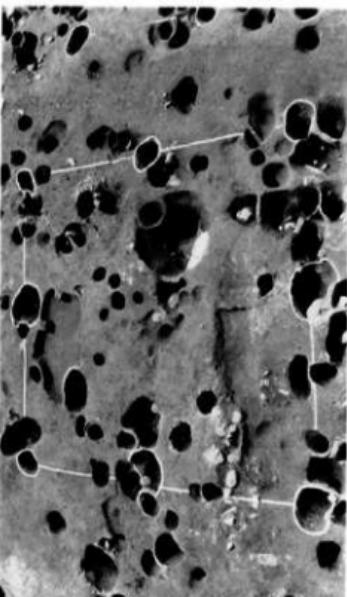
脇山 A 遺跡



(2) C - 2 区 S B906 (西から)



(3) C - 2 区 S B910 (北から)

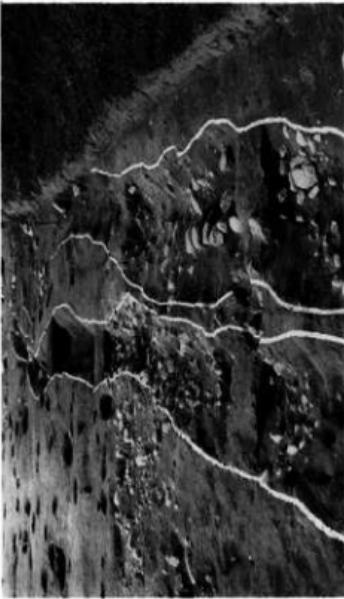


脇山 A 遺跡

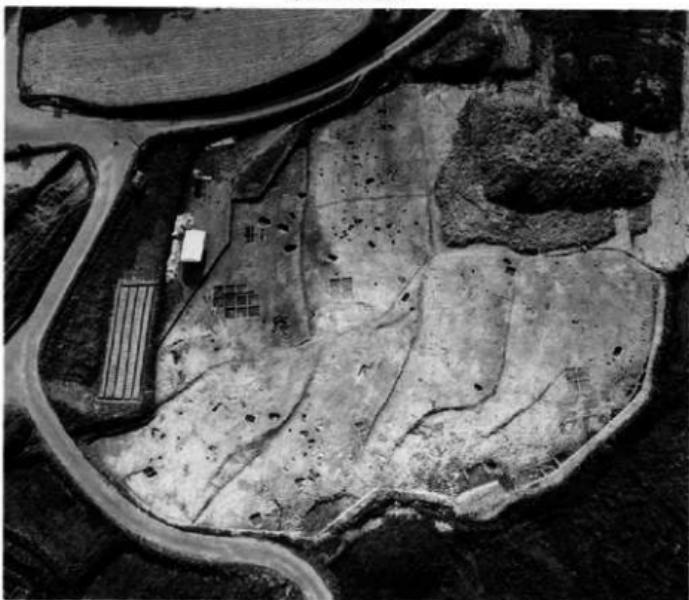
図版 7



(2) C - 2 区 SK766 (東から)



栗尾日遺跡



(1)調査区全景（上空から）



(2)SK014（南から）



(3)SX006（東から）

栗尾日遺跡

図版 9



(2) SX 008 (北から)



(4) SX 036 (北から)



(1) SX 007 (北西から)



(3) SX 019 (東から)

栗尾日遺跡



(2) 1~10アリ ツド上層(西から)



(4) 3・4アリ ツド遺物出土状況(東から)



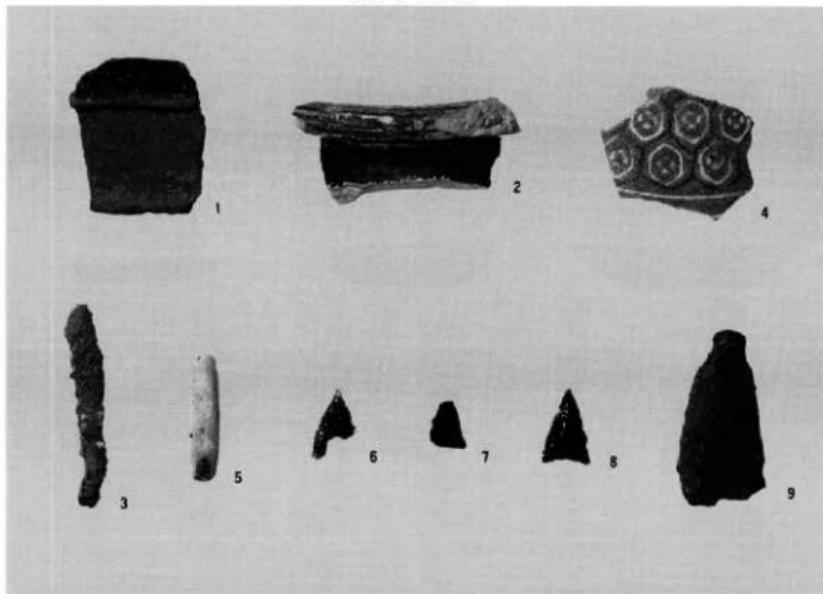
(1) 1~10アリ ツド(西から)



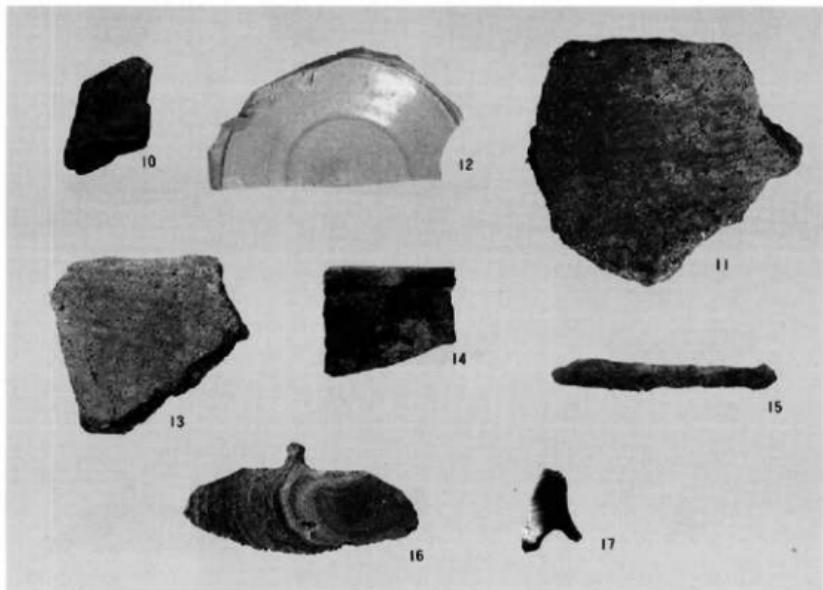
(3) 3・4アリ ツド遺物出土状況(東から)

臨山 A 遺跡

図版11

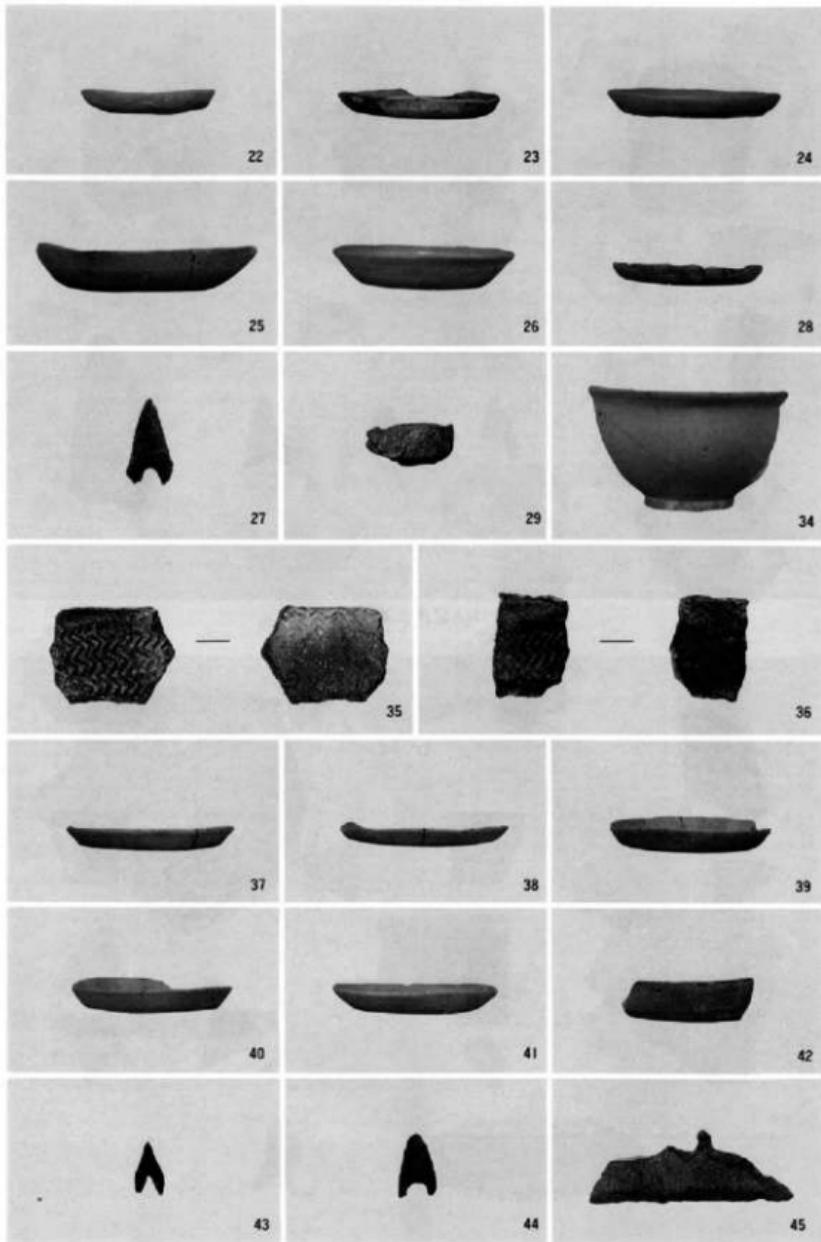


(1) A区出土遺物



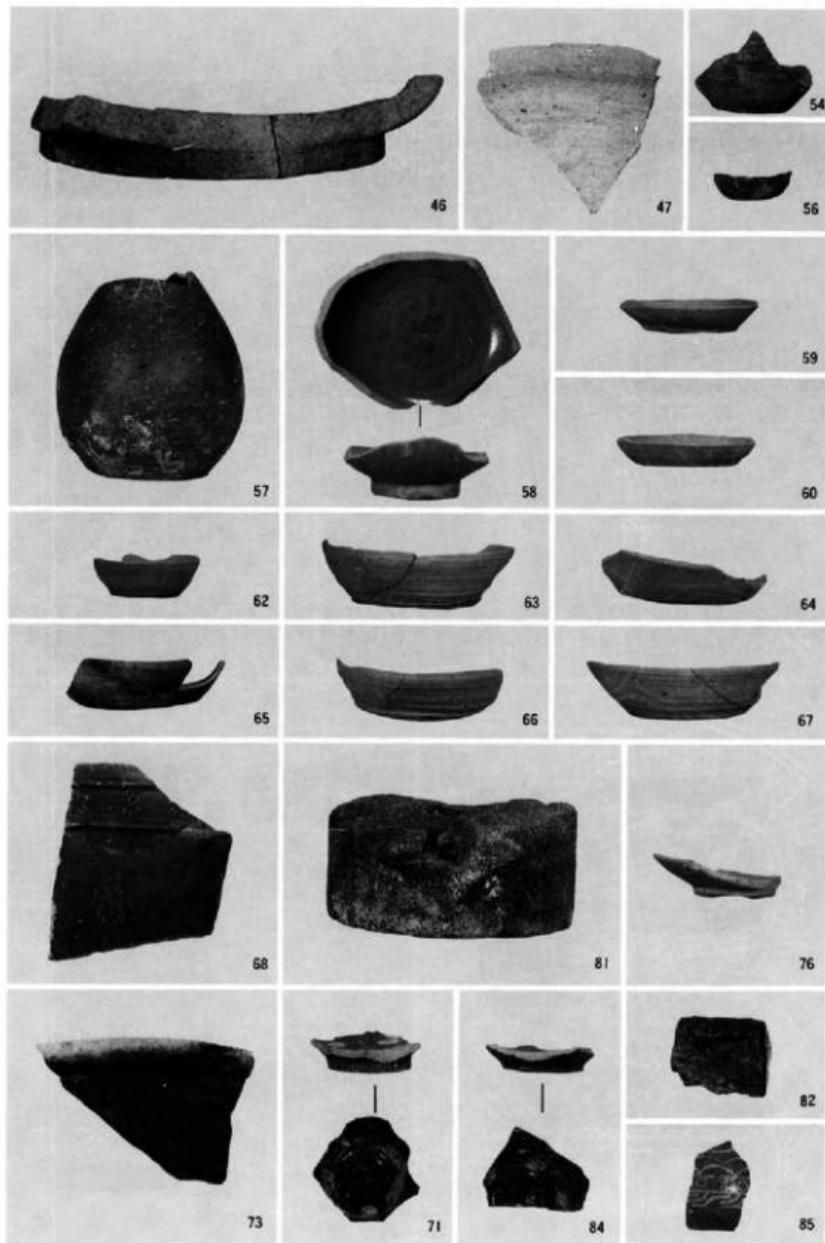
(2) B区出土遺物

脇山A遺跡



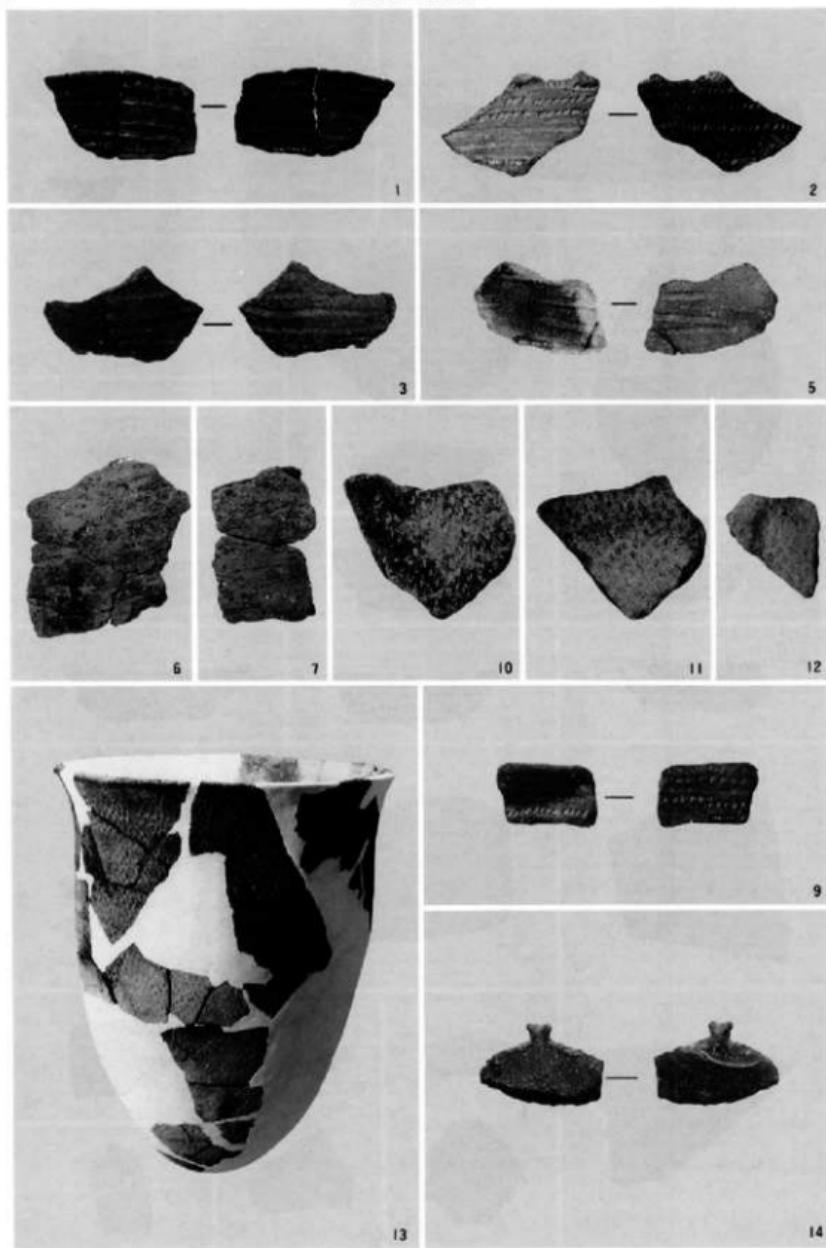
脇山 A 遺跡

図版13



C-2区出土遺物

栗尾B遺跡



栗尾B遺跡出土遺物

わき やま
脇 山 VI

県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡第7次調査報告—

福岡市埋蔵文化財報告書第386集

1994年（平成6年）3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺三丁目28番1号
